

# 宮崎県文化財調査報告書

第 24 集

昭和 56 年 12 月

宮崎県教育委員会

# 宮崎県文化財調査報告書

第 24 集

昭和56年12月

宮崎県教育委員会

## 序

宮崎県教育委員会におきましては、文化財指定のための調査、また、開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は、綾町、田野町、小林市、高原町の各地下式古墳、野尻町の梯遺跡および須木村上ノ原地下式古墳群の人骨について報告するものであります。

本書は、本県の歴史解明のための学術資料として研究に活用していただくとともに、社会教育・学校教育の資料として役立てていただきたいと存じます。

なお、調査にあたり御協力いただいた地元の方々、種々御配慮いただいた地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和56年12月10日

宮崎県教育委員会

教育長 後藤 賢三郎

## 例 言

1. この報告書は、宮崎県教育委員会が実施した文化財調査、埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であるが、綾町、田野町、小林市の各地下式古墳については地元教育委員会において調査されたもので、依頼により掲載するものである。
2. 掲載しているのは、地下式古墳関係5、縄文時代遺跡1の合計6件についてである。
3. 執筆者名、調査期日等は下記のとおりで、本書の編集は宮崎県教育庁文化課が担当した。
4. 地下式古墳、地下式横穴、地下式墳は同一遺構に対しての呼称であるが、使用は各執筆者に従った。

## 記

番号	遺 踪 名	所在地	調査期日	執 筆 者
1	内屋敷地下式横穴	綾町	56. 7. 17~20	面高哲郎
2	高野原地下式1号墳	田野町	54. 9. 4	日高正晴
3	下の平地下式横穴	小林市	56. 1. 29	北郷泰道
4	日守地下式古墳群	高原町	56. 3. 9~18	岩永哲夫
5	梯 遺 踪	野尻町	54. 2. 13~17	面高哲郎
6	上ノ原地下式古墳群 人骨篇	須木村	55. 5. 20~6. 25	長崎大学

## 総 目 次

### 埋 藏 文 化 財

I . 内屋敷地下式横穴発掘調査 .....	1
( 東諸県郡綾町大字南俣字内屋敷 2610 番地 )	
II . 高野原地下式 1 号墳発掘調査 .....	17
( 宮崎郡田野町高野原甲 13124-1 番地 )	
III . 下の平地下式横穴発掘調査 .....	31
( 小林市大字水流追字下の平 179-3 番地 )	
IV . 日守地下式古墳群確認調査 .....	47
( 西諸県郡高原町大字後川内 1-118 番地 )	
V . 梯遺跡発掘調査 .....	89
( 西諸県郡野尻町大字東麓 440-36 番地 )	
VI . 上ノ原地下式古墳群発掘調査 - 人骨篇 - .....	111
( 西諸県郡須木村大字中原字上ノ原 1754 番地 1 )	



# 内屋敷地下式横穴第56-1号発掘調査

東諸県郡綾町大字南俣字内屋敷2610番地



## 例 言

1. 本報告は、昭和56年7月17日から20日まで綾町教育委員会が実施した内屋敷地下式横穴第56-1号の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、県文化課主事面高哲郎、県総合博物館学芸課主事長津宗重が担当した。
3. 本報告の実測、トレースは、面高、長津で行い執筆、編集は面高があたった。

## 本文目次

I 所在地	5
II 調査に至る経過	6
III 調査の結果	
1. 遺構	6
2. 出土遺物	8
IV 結語	10

## 挿図目次

第1図 遺跡所在地	5
第2図 第56-1号実測図	7
第3図 第56-1号出土遺物	9

## 図版目次

図版1 (1)閉塞状況	13
(2)玄室より見た閉塞状況	13
図版2 (1)玄室内人骨出土状況	14
(2)櫛、刀子出土状況	14
図版3 出土遺物	15

## I 所在地（第1図）

綾町は、三角形を呈する宮崎平野の西の頂点に位置する。当町の中央部には、本庄川と綾北川にはさまれ、標高 $0.0\text{m}$ から $8.0\text{m}$ へと緩やかに南東へ傾斜する洪積世の台地があり、台地からは、本庄川流域に開ける沖積世が一望に見渡せ、当地は綾町でも眺望のよい地の1つである。台地の東端付近は、現在、運動公園となっており、同公園のフィールド南端には県指定古墳1基が現存している。

綾町は、山1つをへだてて野尻町と接する。平安時代に編纂された「延喜式」には、国府を中心として16駅が記載されているが、国府より南下する2官道の1つは、国府→亜那<sup>註1</sup>（綾）→野後（野尻）→夷守→真新（真幸）のルートが想定されており、綾町は、えびの方面への古代交通の要衝の地であったと思われる。

地下式横穴は、県指定古墳南東約 $100\text{m}$ の地点で発見された。標高は $8.7\text{m}$ である。この地区での地下式横穴の調査は、今回が初めてであるが、戦前に1基、昭和42～44年の土地改良工事中、指定古墳南 $20\text{m}$ で狭道を東にする長方形妻入りの地下式横穴が発見され<sup>註2</sup>いる。この他、工事中において数回陥没しているが、これらは地下式横穴であった可能性が高く、内屋敷一帯は数多くの地下式横穴が存在すると思われる。



第1図 遺跡所在地

1. 内屋敷地下式第56-1号 2. 昭和42～43年発見地下式横穴 3. 県指定古墳

## II 調査に至る経過

昭和 55 年の秋、高橋善文氏所有のミカン園北西辺の防風林の杉が強風により倒伏し、その後の降雨により陥没部が拡大し、昭和 56 年 7 月、綾町教育委員会の現地調査で地下式横穴であることが確認された。陥没部は、地下式横穴玄室の天井で、今後、更に崩壊することが予想されたので発掘調査を行うことになった。調査は、綾町教育委員会が主体者となり、文化課主事面高哲郎、県総合博物館主事長津宗重の 2 名の担当で昭和 56 年 7 月 17 日から 20 日までの 3 日間実施された。

内屋敷一帯には、地下式横穴が群集し、今後、その発見例も増加すると予想されるので、今回調査した地下式横穴を「内屋敷地下式横穴群第 56-1 号」として記述する。第 56-1 号からは、人骨 1 体分が出土したが、考証は長崎大学医学部第 2 解剖学教室講師松下孝幸<sup>註 3</sup> 氏に依頼した。

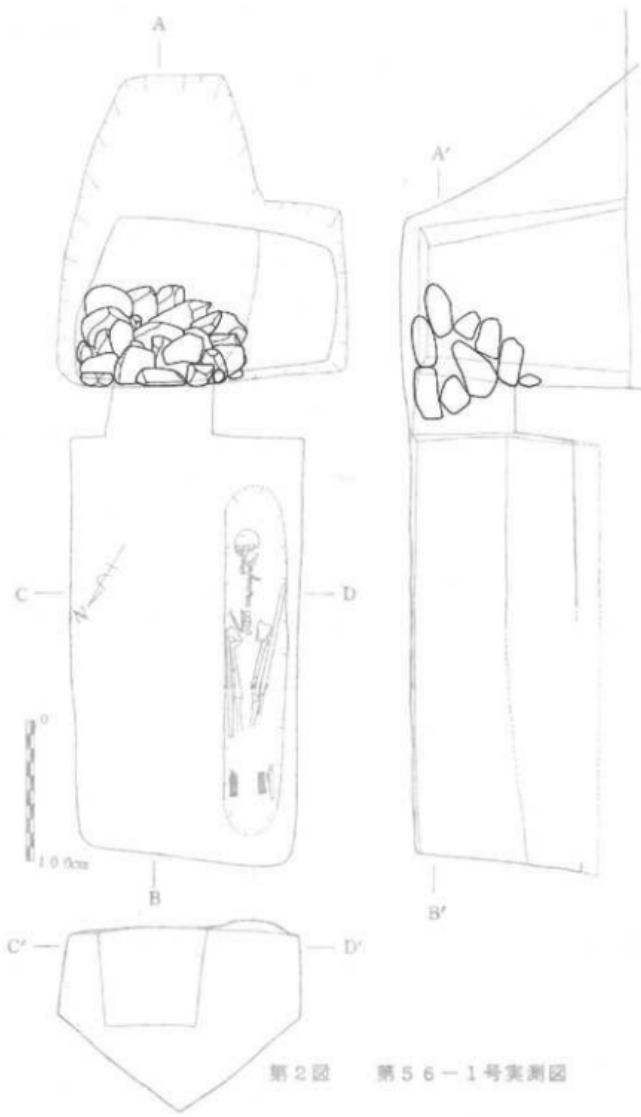
調査期間中、高橋氏には、作業を中止してもらうなど多大な協力をいただき感謝いたします。

## III 調査の結果

### 1. 遺構（第 2

内屋敷地下式横穴は、南東にし、主軸方位は、南北に、関係あり、また、台地等にあります。第 56-1 号の構造について記述する。

竪穴は、幅 1.15 m で、側壁が弧状をなす梯形部であるが、本來逆 L 字状をたるものかについては尋ねたところ、上層である黒色土



第2図 第56-1号実測図

閉塞は、表門閉塞で人頭大から全長40cm、幅30cmの河原石を使用している。表道の位置する梯形部は、長方形部より深いが、閉塞石は、梯形部底面がつき固められ、長方形部のレベルにほぼ等しくされた後、積まれている。

表道は、やや東へ傾る両袖式妻入りである。幅は、表門部で70cm、玄門部で76cmとわずかに逆「ハ」の字様にひらいている。高さは中央部で約76cm、天井はほぼ水平となっている。床面は、玄室に向うに従い高くなっている。

玄室は、幅1.65m、主軸長2.95m、奥壁隅丸の長方形プランで天井は切妻造りである。西壁長3.05m、東壁長2.9m、玄室天井の高さは約1.33mを計測できる。両壁はわずかに外開きに立ち上がり、壁高65cmから75cmである。

玄室の西壁に沿って、深さ7~8cmの屍床があり、全長約2.5m、幅45cm、両端は弧をなしている。屍床内には、頭位を南々東にして男性熟年1体が埋葬され、副葬品は屍床内で検出された。頭蓋骨は、前頭部から顎面にかけて朱が付着しており、これは、埋葬時に朱玉<sup>註5</sup>様のものがおかれていたものと思われる。また、左前頭部には、幅1.8cmの堅櫛が着装された状態でみられた。

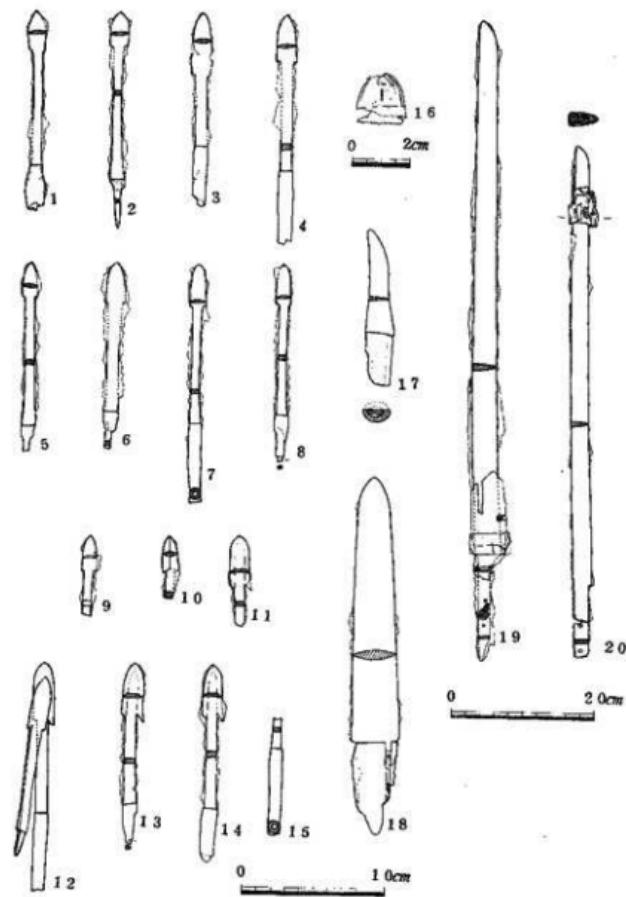
## 2. 出土遺物

出土遺物は、屍床内から直刀、短剣、鐵鎌、刀子が、頭蓋骨左前頭部からは櫛が出土している。直刀は、腰部両側に鋒を頭位方向にして、鐵鎌、短剣は、屍床北端に鋒を反頭位方向にして埋葬されていた。鐵鎌は2束あり、1束8~10本であった。刀子は胸肺で出土し、把は胸椎上にあった。

### 直刀(第3図の19)

屍床西辺で出土した現長91.7cmの直刀である。造込、平造。刀長76.2cm、茎長14.4cm、元幅4.9cm、先幅3.9cm、元重ね0.8cm、先重ね0.6cm、茎幅は中央部で1.7cmが計測される。刀身に若干内反りとなっているが、直刀と見なしてよいと思われる。目釘穴は1ヶ所が確認される。

把は、木表で把元に幅7mmの平織りの紐が巻かれ、把中央部には糸が繁巻きされている。鞘口には、鹿角製の鉗がある。



第3図 第56-1号出土遺物

### 直刀（第3図20）

尻床東邊で出土した直刀である。造込、平造で全長約7.3cm、刃6.27cm、茎長約1.03cm、元幅2.3cm、先幅2.15cm、元重ね0.8cm、先重ね0.8cm、茎幅は中央部で2.2cmを計測される。目釘穴は2ヶ所あり、鞘は合せ木である。

### 剣（第3図18）

全長2.25cm、刃長1.86cm、茎長0.9cmの短剣である。元幅3.4cm。把は木装で、茎には幅1mmの糸が巻かれている。

### 刀子（第3図17）

全長1.07cm、刃長7.2cm、茎長3.5cmの刀子で身に反りがある。元幅2cm、元重ね2mm、茎先幅7.5mm、茎先重ね2mmを計測できる。把は鹿角製である。

### 鉄鎌（第3図1～15）

鉄鎌は、尻床北端で2束発見され、各束の鎌の形式の組合せは異っている。1つは、広鋒両丸造三角形式(1, 2)、両丸造鑿箭式(3, 7, 8)、狭鋒両丸造三角形式(4～6)の8本組、1つは、鍛造両逆刺三角形式(9)、片丸造鑿箭式(10)、断面台形片逆刺箭式(11～15)の10本組である。5は、全長1.51cm、鎌身長約2.5cm、鎌身最大幅1.3cm、鎌被長9.2cm、13は、現全長1.27cm、鎌身長約3.6cm、鎌身最大幅1.6cm、鎌被長6.1cmが計測される。

### 櫛（第3図16）

櫛は、つまみの部分のみ残存している。幅1.8cm、長さ1.8cmで、竹ひごをU字形に折り曲げ緊縛している。緊縛部の幅は0.7cmである。

## IV 結 語

地下式横穴についての近年の調査、研究は、遺物、編年、群構造、社会などについての研究視点が提示され、深化されつつある。

内屋敷地下式横穴第56-1号は、立地が極めて緩やかな傾斜の台地上であるが、堅穴を低位に、玄室を高位方向に向って構築されている。岩永は、このような傾斜地における地下式横穴の構築形態は、基本的に高位方向に玄室を構築するが、地下式横穴の群集内においてこの基本形態にそぐわないものも存在することを指摘し、これは、群構成の意識化を読み取ることができるとしている。<sup>註7</sup> 北郷は、地形的に有利な場所を占地する地下式横穴は、編年的に先行するのではないかと考えている。<sup>註8</sup> このことは、旭台地下式横穴群においては、長方形切妻造平入タイプが岩永の言う傾斜地における基本的構築形態をとり、長方形切妻造平入タイプより後出する長方形寄棟造平入タイプは、先の基本的構築形態にそぐわないとから首肯される。地下式横穴が群集過程において、構築形態は時期によりその規制が変化していると考えられるが、今後の課題としておきたい。

長方形切妻造妻入タイプは、屍床をもつ例は多いが、一般に玄室中央部に位置し、単独葬の場合が多く、編年的に古式タイプとされる。内屋敷地下式横穴群第56-1号のように屍床が一方に偏するのは、飯盛53-1号の2例である。<sup>註9</sup> 飯盛では、北方向に玄室が構築され、屍床は東壁に一ヶ所あり、屍床内に1体、玄室中央部に1体の2体埋葬で副葬品は刀子、管玉のみであった。このタイプの調査例は2例のみであるが、玄室中央に屍床をもつタイプに後出すると考えられる。

内屋敷地下式横穴の遺物については、櫛の出土および出土状態が注目される。櫛が頭部に着装された状態で出土するのは全国でも稀であるが、県内の出土例は、須木村上ノ原地下式横穴第9号について2例めである。上ノ原では、その被葬者を坐者の性格が考えられており、内屋敷地下式横穴第56-1号の被葬者を考えるうえで興味深い。

内屋敷地下式横穴第56-1号は、構造、出土遺物より、5世紀末ないし6世紀初頭の所産と考えられる。

註1 日高次吉「宮崎県の歴史」山川出版社

註2 出土遺物は、直刀1、刀子2、鐵鎌5、馬具があり、現在、綾陽校記念館に保管展示されている。

註3 人骨については、後日報告される予定。

註4 地下式横穴の構造の表記は、玄室平面形、天井の形態、通道の位置の順である。

註5 松下孝章氏教示による。人骨は、第3類推まで融合しており、首の運動は不自由であったろうと推定されている。

- 註6 朱玉はベンガラで、小林市尾中原地下式横穴など地下式横穴からの出土例は多く、  
国富町東ノ原地下式横穴では、須恵器の杯身より朱玉2個が出土している。
- 註7 岩永哲夫、茂山謙一「七ノ原地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第  
23集 宮崎県教育委員会 昭和56年3月
- 註8 岩永哲夫、北郷泰道 「日守地下式古墳群発掘調査(55-1~4号)」宮崎県  
文化財調査報告書第23集 宮崎県教育委員会 昭和56年3月
- 註9 石川恒太郎他 「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第19集  
宮崎県教育委員会 昭和52年3月
- 註10 旭台地下式横穴群の構造は4分類され、長方形切妻造平入のタイプにのみ装飾が  
みられる。
- 註11 面高哲郎、岩永哲夫 「飯盛地下式横穴53-1号発掘調査」宮崎県文化財調査  
報告書第22集 宮崎県教育委員会 昭和55年3月
- 註12 註7と同じ。



(1) 閉塞状況



(2) 玄室より見た閉塞状況



( 1 ) 玄室内人骨出土状況



( 2 ) 械、刀子出土状況



出 土 遺 物  
-15-



# 高野原地下式1号墳発掘調査

宮崎郡田野町高野原甲13124-1



## 例 言

1. 本報告は昭和54年9月4日田野町教育委員会が実施した田野町高野原地下式1号墳発掘調査の報告である。
2. 本調査は田野町教育委員会の依頼により県文化財保護審議会委員日高正晴が担当した。
3. 本報告の執筆は日高があたり、編集は県文化課が行った。

## 本文目次

I 所在地	21
II はじめに	21
III 内部構造	23
IV 出土遺物	24
V まとめ	25

## 挿図目次

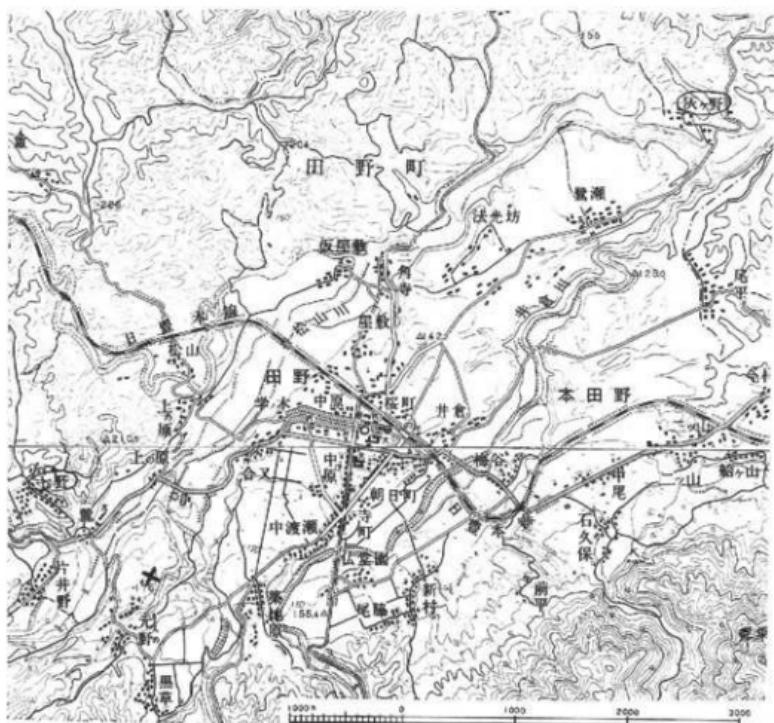
第1図 遺跡所在地	21
第2図 高野原地下式墳実測図	23
第3図 副葬品実測図	24

## 図版目次

図版1 (1) 発掘現場の近景	27
(2) 淡道から玄室を見る	27
図版2 (1) 玄室と閉塞石	28
(2) 壓穴と玄室	28
図版3 副葬品	29

## I 所在地（第1図）

田野町高野原甲 13124-1



遺跡所在地 (X印は地下式墳発見地)

## II はじめに（第1図）

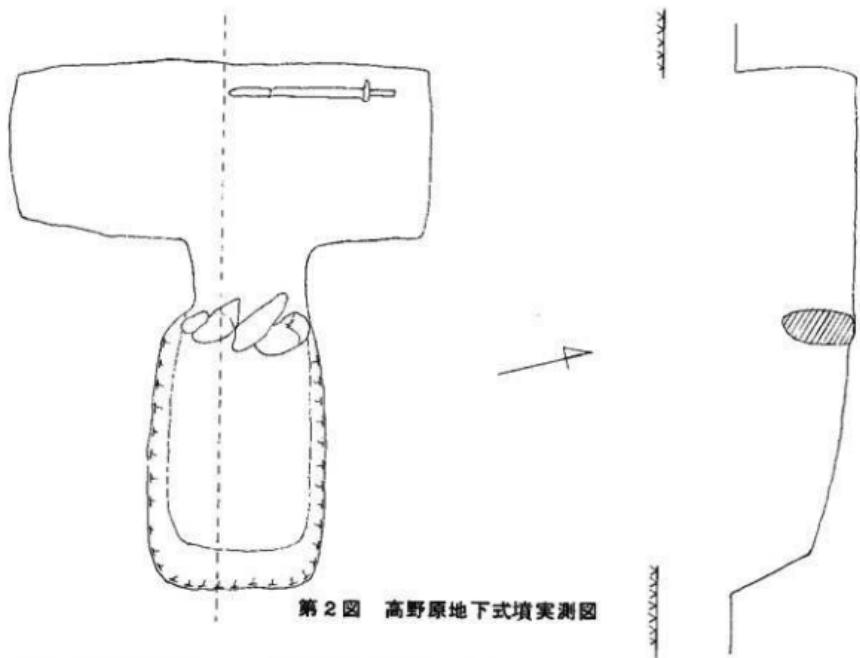
田野町高野原の畠地を、地主の日高義正氏がトラクターにて耕作中、突然、地面が陥没したので、現地調査に赴くようにとの、県教委文化課からの依頼で、昭和54年9月4日、田野町教育委員会の田原信幸主事らと発掘調査を行った。

ところで、田野町を流れている清武川の上流は、松山川と変り、さらに上の原付近で分流し、別府田野川と片井野川に分れるが、この二支流に挟まれた三角形状の広い平坦な台地が、標高約170mの高野原である。この台地上から東北の方を望むと、低い台地が清武方面に開けているが、一方、南から西の方へかけては鶴塚山山系の高い山々がそびえている。この地下式墳発見地点の台地のすぐ東の方には、別府田野川の小支流が流れしており、その地域に元野の集落がある。ところで、宮崎県内の地下式墳の分布状態からみると、清武・田野方面は、ほとんど発見例がなく、わずかに、昭和47年8月と同年9月の2回にわたり、清武川左岸台地上の田野町灰ヶ野において地下式墳が2基発見され、発掘調査が行われただけである。それで、今まで古墳時代の遺跡としては高塚墳も確認されていないので、このたびの高野原での地下式墳の発見は、田野町の古代史を探究する上からも注目しなければならない。また、この広い台地上には、ほかにも地下式墳が存在するはずであると考えていたが、その後、町教委の方の談話によると、以前、この高野原台地から地下式墳らしき遺構が発見されたとのことであった。

では、どうして田野町でも辺地にある高野原台地に地下式墳が群集しているのであろうか、そのことについて、歴史地理的見地から考えてみたいと思う。大和国家における中央集権的な律令体制下においては、京から地方の国衛に至る官道が設けられたが、日向においても、奈良、平安時代を通じて、西都市に所在した日向国府を中心に官道に沿って駅が設置された。延喜式によると、日向には16駅あったと記されている。この官道は国府の存在した西都市三宅付近において二つに分かれ、一方は亜那駅、野尻駅、夷守駅、真新駅を経て肥後の球磨郡に通じる駅路と西都から南に下り、宮崎郡の各駅を通り都城地区と推測される島津駅に到る駅路である。この途中に教磨郡と教武駅がある。宮田真吉著『日向国史』上巻によると、教磨駅は宮崎市熊野に比定されているが、教武駅については、その所在は明らかではないとされながらも、田野町七野付近に想定されている。この七野の直ぐ東の方の広い台地が、このたび地下式墳の発見された高野原台地であることから考えると、田野地方における古代の中心地に教武駅が設置され、さらにその駅路時代をさかのぼる古墳時代に七野一帯から高野原にかけて古代集落が存在したのではないかであろうか。そして、灰ヶ野からも地下式墳が発見されたことから推測されることとは、清武を通過した古代交通路は田野では清武川の北岸を通り、七野地区から青井岳山系を越え諸県の水俣(三股)駅を経て島津駅に通じていたと思われる。

また、平安時代末期、「鹿谷の変」により鬼界ヶ島に流された俊寛僧都らが通った道筋として、『源平盛衰記』に記されているように、宮崎市の赤江港に上陸した一行は清武の船引

を経て、おそらく灰ヶ野村近から七野地区を通過、島津の庄へと足どり重く、歩を進めたものと思う。



第2図 高野原地下式墳実測図

### Ⅲ 内部構造 (第2図、図版1、2)

現地調査によって、陥没穴は地下式墳であることが判明したが、トラクターによる耕作のため、玄室、羨道部とともに天井部は破壊されていた。

それから、この地域の地層は黒色の腐蝕土層が約30cm、その下は灰褐色粘土質層になっている。地下式墳はこの層を掘削して營造されていた。なかに落ち込んだ崩土を掲げると、第2図のような玄室の一方の長軸に羨道が開口している平入型の地下式墳が現出した。本墳の主軸の方向はN74°Wとなっており、羨道は東東南の方向に向いている。玄室は奥行(中央部)75cm、幅174cmで横の方へ細長い形式である。また、玄室の四隅はすべて角張っているが、天井部の形式は崩落がはげしいため不明である。しかし、内部遺構から推測す

ると、切妻様式からドーム型の様式に移行する過渡期の形式のようである。なお、床面には何らの遺構も認められず、敷石なども全く施されていない。葬道は玄室の床面と同一レベルで、奥行31cm、幅45cmとなっているが、高さは大井戸が崩壊しているため不明である。また、葬門の所に閉塞石として、約25cm～40cmの自然石4ヶが立石の状態にて並べられていた。堅穴は横円形状を呈しているが、その東側は、当時の地表面から一旦、急傾斜で下がり、その後は緩やかな勾配をもって葬道に連なっている。堅穴は長さ115cm、幅74cmある。

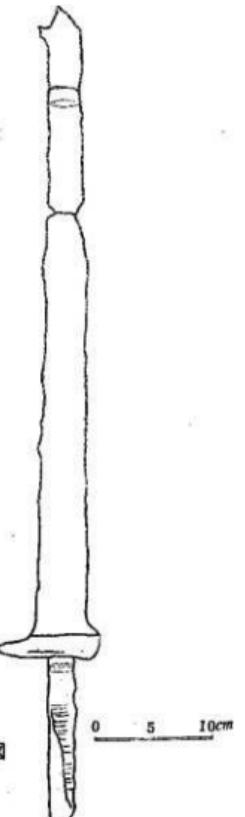
#### IV 出土遺物

本墳の陪葬品としては、玄室内の西北部壁面寄りに劍が一柄、発見されただけで、ほかには何らの遺物も検出できなかった。

##### 劍（第3図、図版3）

出土の劍は全体に錆化が進んでいるが、鞘の中ほどには、木質部が、わずかではあるが遺存している。また、劍身は中央部から鉾の間で2ヶ所折れていた。さらに柄元の部分には鹿角製器具が着装されているが、また、柄頭に寄った部分には、細い織維質の物で柄を巻き締めてあるのが確認できる。柄の部分は、ちょうど、柄元で折れているが、劍全体としては完全に接合できる。劍の全長は69.2cm、劍身55.2cm、劍身の中程から少し鉾寄りで、身の幅3.3cm、同じく厚さ0.7cmとなっている。また、柄の部分は長さ1.4cm、幅2.2cm、それに厚さ0.8cmである。

第3図 副葬品実測図



## V まとめ

以上、高野原発見の地下式墳について考察してきたが、既述したように、田野町においては古墳時代の遺跡、特に、墳墓に関して、極めて発見例が稀であり、灰ヶ野の地下式墳以外は、全く認知されていない。また、このたびの地下式墳発見によって、もたらされる歴史的見解としては、七野を中心とした高野原一帯が、田野地域における古代交通路の要衝にあたっていたのではないかということである。

さて、この地下式墳における玄室の内部構造は長軸に羨道を有する平入り式の形式になっているが、昭和47年8月、田中茂氏によって発掘調査された田野町灰ヶ野の地下式墳<sup>(1)</sup>、さらに同年9月、石川恒太郎氏により調査された地下式墳の、それぞれの玄室内部も、ともに、この高野原の場合と同様、玄室に対し羨道が直交する平入り式の形式になっている。また、田中氏調査の地下式墳の副葬品としては、本県では珍しい蛇行状剣身も発見されており、編年的にも同一年代に比定されそうである。また、この高野原の地下式墳のプランに極めて類似しているものとして、六野原の桃木畠地下式A号墳をあげることができる。この場合も鹿角袋の刀子が1本発見されているが、両方の地下式墳とともに、玄室の構造が、ほぼ同一形式を示している。それで、筆者は大型で玄室の短軸の方に羨道を有する妻入り型の地下式墳を第一様式とし、このように玄室の長軸に羨道を有する平入りの形式を第2様式とした。そして、第2様式の中でも第1様式的遺構の遺存しているものを第2様式A類に類別した。このように分類すると、本墳の編年も桃木畠と同様、第2様式A類とするのが妥当と思われる。それで、年代的には、6世紀初頭頃と推定したい。

ところで、今まで、宮崎市の下北方の地下式墳から以南、清武町にかけて確認されたことのない地下式墳が飛び離れて、田野町だけに発見されていることを、どのように考察したらよいか。そこで考えられることは、前述したように、古代官道に沿って、西の方、青井岳の山地を越えると、すぐ山之口、高城方面の地下式墳分布地に達なる。それで、古代において諸県地方との交流により、地下式古墳文化の流入があったのではないかと考えられるが、一方、國富町六野原で、類似した地下式墳が発見されていることも考慮に入れると、今後、田野地方の文化交流について、さらに究明を重ねなければならないと思う。なお、この高野原台地から、今後、地下式墳が発見されることを想定して、本墳を1号と名称づけておく。

註 (1) 田中茂「灰ヶ野地下式横穴」宮崎県立総合博物館『研究紀要』昭和47年度

(2) 石川恒太郎「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第17集 県教育委員会 昭和48年3月

- 註 (3) 日高正晴「宮崎県桃木畠地下式A号墳」『古代学研究』第64号  
(4) 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻4号  
(5) 註(3)と同じ。



(1) 発掘現場の近景



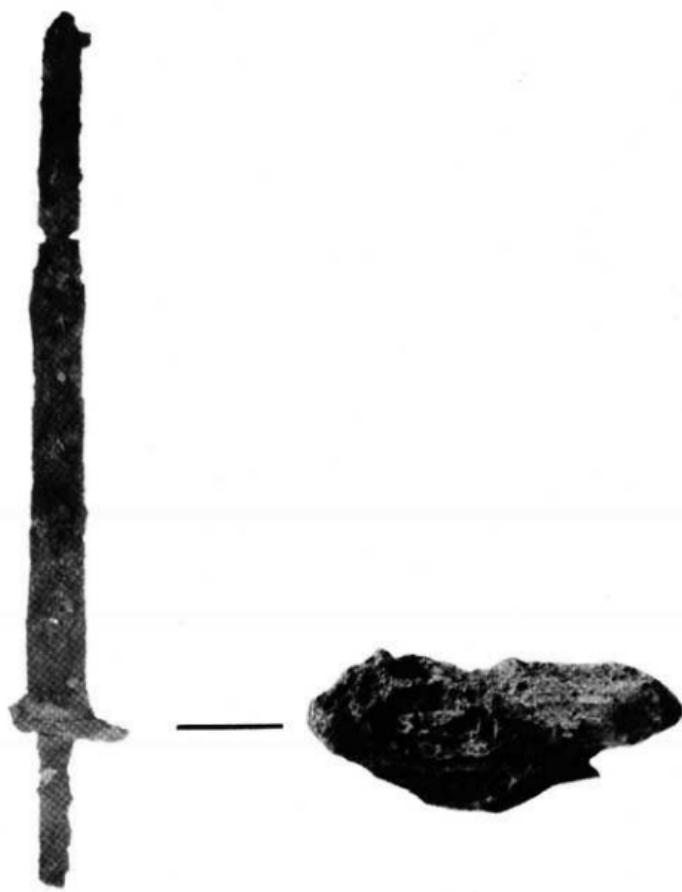
(2) 焙道から玄室を見る



(1) 玄室と閉塞石



(2) 豊穴と玄室



副葬品



## **下の平地下式横穴発掘調査**

小林市大字水流迫字下の平179~3番地





右壁線刻文



## 例 言

1. 本報告は昭和56年1月29日に小林市教育委員会が実施した下の平地下式横穴の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、県文化課主任主事岩永哲夫、主事北郷泰道が担当した。
3. 本報告の執筆・編集には北郷があたった。

## 本文目次

I はじめ	37
II 調査に至る経緯	37
III 調査の結果	38
IV まとめ	42

## 挿図目次

第1図 遺跡所在地	37
第2図 下の平地下式横穴実測図	39
第3図 副葬品実測図	41

## 図版目次

カラーポ絵 右壁線刻文	33
図版1 (1) 発掘前の状態	43
(2) 壁面部閉塞石の状態(北から)	43
図版2 (1) 壁面部閉塞石の状態(南から)	44
(2) 奥壁副葬品の状態	44
図版3 (1) 右壁線刻文と副葬品の状態	45
(2) 頭蓋骨の状態	45
図版4 出土副葬品	46

## I 所在地（第1図）

下の平地下式横穴は、大淀川の支流岩瀬川の右岸、国道268号線添いの台地上に位置し、小林市大字水流迫字下の平179～3番地に所在する。

小林市においてこれまで発掘調査された地下式横穴は、尾中原地下式横穴<sup>(1)</sup>、新田場地下式横穴<sup>(2)</sup>等であるが、下の平周辺地においても過去発掘調査はなされていないが地下式横穴の存在は幾つか知られており、やはり一つの群集地と考えられる。



第1図 遺跡所在地（○印）

## II 調査に至る経緯

土地所有者である伊木操氏（小林市大字水流迫下の平204の2）が、ゴボウの播種を行おうとトレンチャーによる耕作を実施したところ、地表に陥没が生じ今回の発見となった。小林市教育委員会では、早速県文化課と連絡を取り昭和56年1月29日発掘調査を実施す

ることになった。

発掘調査は小林市教育委員会が調査主体となり、県文化課主任主事岩永哲夫・主事北郷泰道が調査員として発掘調査に当たった。

### III 調査の結果（第2図）

トレンチャーの掘削により堅壙部側の天井部半分程は崩壊し、又永年の耕作により堅壙部の本来の掘り込み面は失われていた。

玄室の主軸は堅壙の主軸に対し、東へ約 $24^{\circ}$ 偏っていた。玄室の構造は、左片袖とみられるが、右壁も5cm程の袖部の掘り込みが見られた。淡門部は河原石による閉塞で、平入り・天井部は切妻造りの変形と思われる。玄室は、天井部を第1オレンジ（アカホヤ）層とし、以下は黒褐色土層に掘り込んで構築されている。

玄室の規模は、奥壁幅192cm、左壁幅221cm、右壁幅196cm、淡門部側の幅198cm、天井の高さ約90cmを測り、四周には幅12~33cmの棚状施設が設けられている。

被葬者は3体で、副葬品はすべて棚状施設上に置かれていた。

また、玄室右壁には格子目状の線刻と束柱を表現したと思われる線刻が彫り込まれていた（図版3-1）。

### 遺物（第3図）

遺物は棚状施設上への副葬の状態から2群に分けられる。1群は、奥壁棚状施設上のもので、2群目は右壁棚状施設上のものである。以下は各群に分け、遺物について記述する。

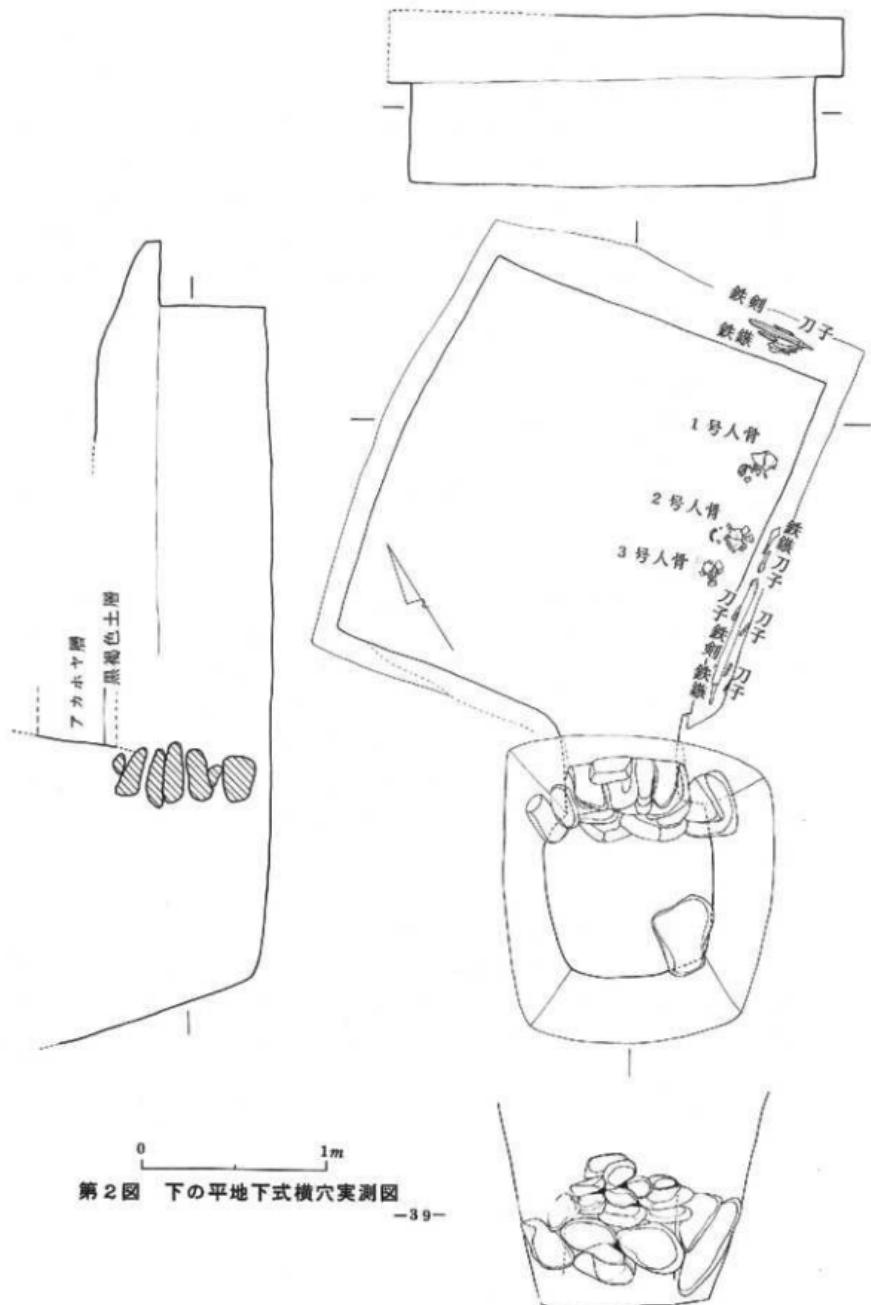
#### 1群の遺物

##### 鉄剣（第3図2）

現存長37.9cmで鋒をわずかに欠損している。現存の身長27.9cm、闕よりでの身幅3.2cm、鋒よりでの身幅2.6cmを測る。身の厚さは中央部で0.4cmである。茎には把の木質がわずかに残存し、目釘穴が1箇所確認出来る。茎幅は闕よりで2.4cm、把頭よりで1.5cmを測る。

##### 刀子（第3図4）

鋒部を欠損し、現存長9.4cmを測る。闕よりでの身幅1.7cm、背幅0.3cmである。



第2図 下の平地下式横穴実測図

### 鉄 錐 (第3図9~12)

鉄錐は4本で、大略三角形式に属するが、2群の鉄錐に比し小型のものであることが注目される。9は鋒にかけてやや丸みを帯び、現存長12.1cm、最大錐身幅2.9cm、身の厚さ0.2cmを測る。10・11は同タイプの鉄錐で、10より11の方がややかえりがきつくなっている。10は、現存長13.1cm、最大錐身幅3.1cm、身の厚さ0.4cmを測る。11は、現存長15.1cm、最大錐身幅3.1cm、身の厚さ0.3cmを測る。12は鋒部を大きく欠損し、現存長11.6cmを測る。

### 2群の遺物

#### 鉄 剣 (第3図1)

現存長70.2cm、身長57.3cm、関よりでの身幅3.7cm、鋒よりでの身幅2.8cm、茎の中央部幅1.9cm、身の厚さ0.5cmを各々測る。鞘の木質が片面の関により遺存し、目釘穴は1箇認められる。

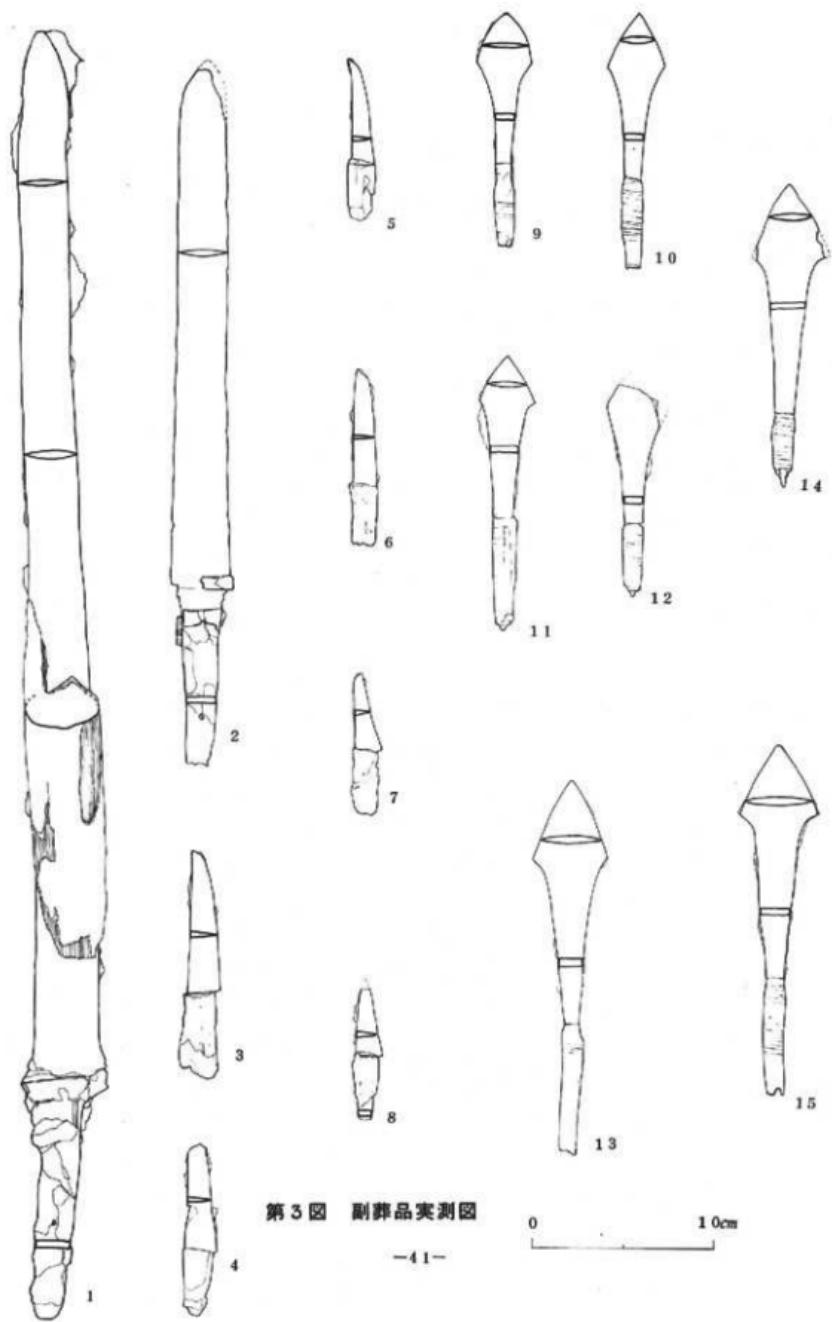
### 刀 子 (第3図3, 5~8)

3は、副葬された刀子中最も大きく現存長12.5cm、身長7.8cm、身の最大幅1.8cm、背幅0.4cmを測る。

5は、現存長8.4cm、身長5.3cm、身の最大幅1.3cm、背幅0.3cmを測る。6は、現存長9.6cm、身長6.3cm、身の最大幅1.3cm、背幅0.2cmを測る。7は、現存長7.8cmで若干鋒を欠き現存身長4.2cm、身の最大幅1.5cm、背幅0.3cmを測り、鋒から刃刃にかけて湾曲した切り出し部をもつ。8も鋒を欠損し現存長7.2cm、現存身長3.6cm、身の最大幅1.5cm、背幅0.3cmを測る。

### 鉄 錐 (第3図13~15)

13は、現存長20.6cm、最大錐身幅4.1cm、厚さ0.4cm、14は、現存長16.4cm、現存錐身幅3.7cm、厚さ0.3cm、15は、現存長19.2cm、最大錐身幅4.3cm、厚さ0.5cmをそれぞれ測る。いずれも竹の矢柄が遺存し、桜皮も認められる。



第3図 副葬品実測図

0 10cm

## IV まとめ

以下の平地下式横穴の平面プランは特徴的で、堅壙主軸に対し玄室はやや南東に偏するものであった。こうした傾向は、国富町高田原地下式横穴等にも見られる。

玄室右壁に認められた線刻文様は、格子目状と束柱を表現したものと思われ、束柱を浮彫で表現した日守地下式横穴<sup>(4)</sup> 54-1号、旭台地下式横穴<sup>(4)</sup> 7号・9号・11号、朱影で表現した旭台地下式横穴<sup>(5)</sup> 6号があるが、本地下式横穴は単純な線刻のみで表現されている。又、格子目状の文様を線刻した地下式横穴は新発見に属する。

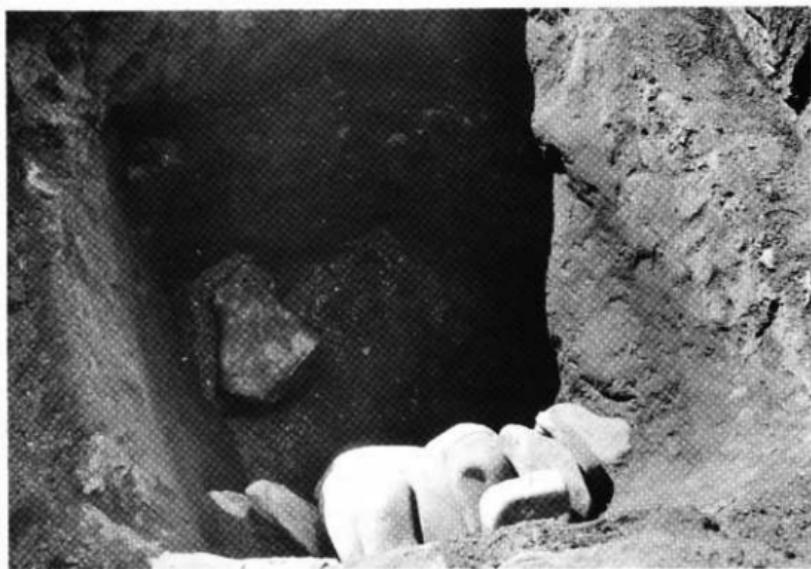
地下式横穴の年代としては、六世紀前半に位置付けられよう。

### ( 註 )

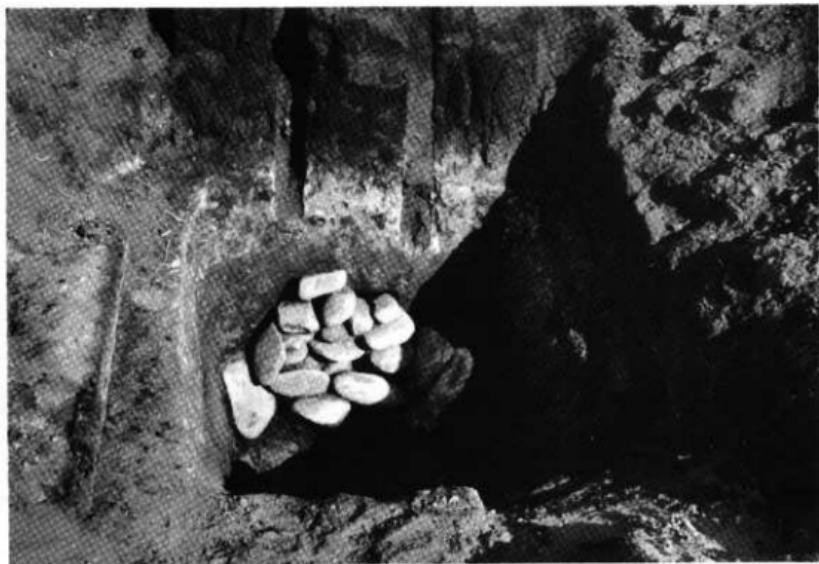
- (1) 栗原文蔵「小林市尾中原発見の地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第9輯(昭和39年)
- (2) 岩永哲夫「新田場地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集(昭和53年)
- (3) 昭和56年5月に国富町教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。
- (4) 岩永哲夫ほか「日守地下式横穴54-1~4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集(昭和55年)
- (5) 石川恒太郎ほか「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集(昭和52年)



(1) 発掘前の状態



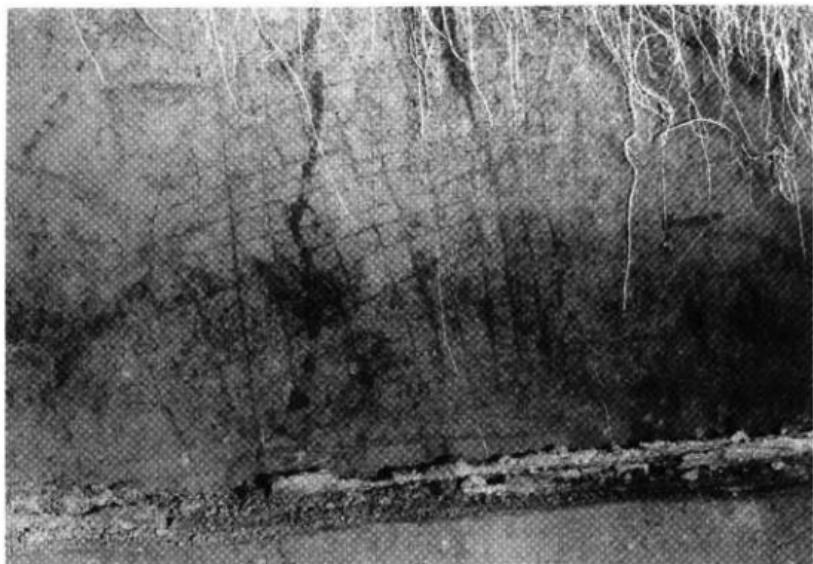
(2) 番塙部閉塞石の状態（北から）



(1) 畇塙部閉塞石の状態（南から）



(2) 奥壁副葬品の状態



(1) 右壁線刻文と副葬品の状態



(2) 頭蓋骨の状態 (右から 1号、2号、3号人骨)



出土副葬品  
-46-

## 日守地下式古墳群確認調査

西諸県郡高原町大字後川内1-118番地



## 例　　言

1. 本報告は昭和56年3月9日から同月18日まで宮崎県教育委員会が実施した西諸県郡高原町日守地下式古墳群確認調査の報告である。
2. 本調査は文化課主任主事岩永哲夫が担当した。
3. 本報告の執筆・編集は岩永があたり、宮崎大学教育学部教授遠藤尚氏には玉稿をいただいた。記して感謝申し上げる。

## 本文目次

I	はじめ	52
II	日守地区における調査小史	53
III	調査経過	55
IV	調査結果	55
1	遺構	57
2	遺物	59
V	結語 (付論)	62

宮崎県西諸県郡高原町日守遺跡の地形的・地質的背景

宮崎大学教育学部教授 遠藤 尚

1	はじめに	77
2	遺跡周辺における山地と凹地の配列	79
3	凹地域の埋積	80
4	凹地底の段丘化	81
5	日守遺跡について	83

## 挿図目次

第1図	遺跡所在地	52
第2図	日守地下式古墳群分布図	56
第3図	1号地下式古墳実測図	57
第4図	4号地下式古墳実測図	58
第5図	7号地下式古墳竪坑部壁面実測図	59
第6図	E-9×上器群実測図	59
第7図	H-10×土器群実測図	60

第8図 出土遺物実測図(1) .....	61
第9図 出土遺物実測図(2) .....	61
第10図 出土遺物実測図(3) .....	62
(付論)	
第1図 宮崎県西・北諸県地方の山地と凹地 .....	78
第2図 日守遺跡周辺の地形・地質区分図 .....	80
第3図 日守遺跡における火山灰層 .....	84

### 図 版 目 次

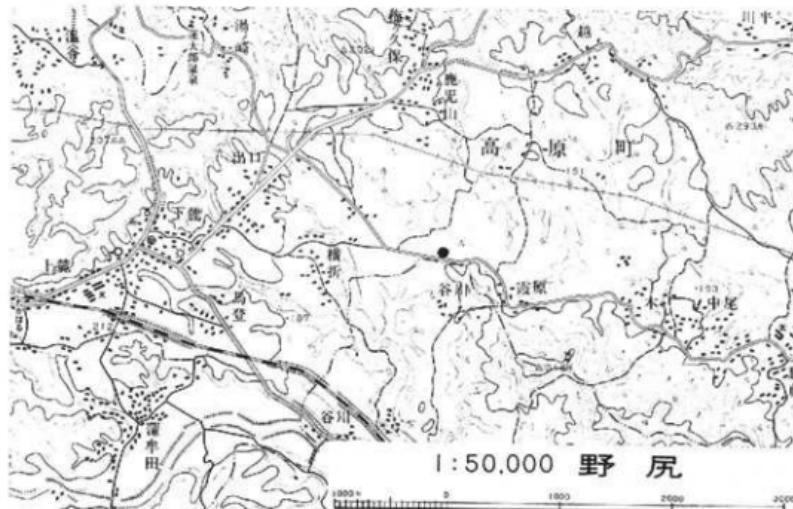
図版1 (1) 遺跡遠景 .....	65
(2) 発掘作業状況 .....	65
図版2 (1) 1号地下式古墳竪坑 .....	66
(2) 2号地下式古墳竪坑 .....	66
図版3 (1) 3号地下式古墳竪坑 .....	67
(2) 剣出土状況 .....	67
図版4 (1) 4号地下式古墳竪坑 .....	68
(2) 4号玄室上部土層状況 .....	68
図版5 (1) 5号地下式古墳竪坑 .....	69
(2) 6号地下式古墳竪坑 .....	69
図版6 (1) 7号地下式古墳竪坑 .....	70
(2) 高杯出土状況 .....	70
図版7 變出土状況 .....	71
図版8 出土遺物 (1) .....	72
図版9 " (2) .....	73
(付論)	
図 版 日守遺跡西側土層断面 .....	75

# I はじめに

地下式古墳は南九州特有の古墳時代墓制の一つである。宮崎・鹿児島両県にまたがり分布するが、本県の諸県地方から最も多く発見されている。発見の契機は、ほとんどが工事中や畠地耕作中などに玄室天井部が偶然陥没することに因っている。それは、構築の一要素として盛土を行ったかどうかは別の問題として現況では地上標識を有しないものが大半を占めるに起因している。えびの市小木原古墳、久見迫・馬頭・灰塚地下式古墳群は、昭和47・48年九州縦貫自動車道建設工事に際し、事前調査として県教委により発掘調査が行われたが、これ等は数少ない事前調査の例である。

(1) 石川恒太郎氏の資料によると、昭和54年7月現在県内では約500基発見されている。地下式古墳の性格上、一度開口すると、玄室内部の風化侵蝕が進み、保存には非常な困難が伴うことは周知のことであり、現に保存されている例は西都原地下式第4号の一基のみとなっている。また、工事等の結果発見されるため、より一層保存を困難にしている。

今回の日守地下式古墳群における確認調査は、道路建設事業及び採土工事によって発見されたものを手掛りとして、周囲丘陵にも相当数存在するのではないかという予測から、東側



第1図 遺跡所在地 (●印)

丘陵について、地下式古墳群の全容（分布状況）を把握し、遺跡保護の基礎資料を作成することを目的としたものである。

現在までのこの日守地区における発掘調査例は、11基にのぼるが、道路開削の際確認された6基を合わせると17基の多くの多くを数える。また現況が保たれている丘陵の法面に2ヶ所地下式古墳の堅坑とみられる痕跡が観察されることや、残っている丘陵の面積の広さを考えるならば、なお相当数の未確認地下式古墳が存在することは容易に予測できることであった。

注1 石川恒太郎 「増補地下式古墳の研究」昭54。

## Ⅰ 日守地区における調査小史

西諸県郡高原町大字後川内日守地区において、地下式古墳の調査が行われたのは昭和44年夏の宮崎県教育委員会による九州縦貫自動車道遺跡分布調査が最初である。この頃既に県道有水高原線は開通していたが、道路建設の際の工事によって削取された道路北側法面に開口していた6基の地下式古墳が確認された<sup>(1)</sup>。地下式古墳の所在している場所は、低い小丘陵を成しており、切土工法による道路で二分されている状況である。

その後、同年12月道路南側の北諸県郡高崎町大字前田坂屋尾において、ブルドーザーにより傾斜のある畑地を削平工事中、地下式古墳が2基発見され、発掘調査が行われている。

更に翌45年3月同地において1基が発見され、高崎町教育委員会によって調査されている<sup>(2)</sup>。現在の行政区は異にしているものの地理的に群として括されるべきで、総称日守地下式古墳群として差し支えないであろう。

1号は四方に幅広の棚状施設を有した「左片袖」の玄室を持つ。副葬品は豊富で、斧頭、貝釧が注目される。2号は軽石による渓門閉塞であり、日守地区においては数的に限られた「両袖」の玄室である。3号は1号と同じく「左片袖」の玄室構造で、三方に棚状施設を有する。副葬品も豊富で、劍、刀子、鉤、二段逆刺を含む各種鐵器が出土しており興味深い。また、旭台において見られた彩色繪文が施されており、副葬品の豊富さとともに後の日守55-2号に共通するものである。

更に10年を経過した昭和54年5・6月に道路北側の口守1-119番地で、小林地区農業協同組合高原支所の採土作業中に4基が相次いで発見された。4基はいずれも西諸県地方特有の「片袖型」玄室を有し、渓門閉塞形式である。この内1号玄室には仏教建築の影響を示唆する束柱の浮彫がみられ、旭台以来注目を浴びている「装飾」地下式古墳に新しい資料を加えることになった。

## 日守地下式古墳群発掘調査一覧表

番号	調拂品	品	閉塞	玄室	形	式	鑿造方位	竪坑-玄室	被拂者数	調査年月日	文獻
1 仮屋尾 刀装具	劍2, 刀子2, 斧頭1, 鋸齒9, 鋼鐵片1, 銅鏡片1, 銅鏡片2	美術 自然石	門 圓方鏡 自然石	平入左片袖方形 圓方鏡 自然石	西-東	不 明	昭44.1.21.5	「高輪町飯塚尾地下式古墳群発掘調査報告書第1.5集」解4.5.3			
2 仮屋尾 刀	劍1, 刀子2, 鋸齒6	美術 自然石	門 圓方鏡 自然石	半入右片袖方形 一方鏡 自然石	南-北	不 明					
3 仮屋尾 刀	劍1, 刀子6, 斧2	美術 自然石	門 圓方鏡 自然石	平入左片袖方形 三方鏡 自然石	西-東	4 体	昭45.3.13	高輪町斎藤委託文化財調査報告書第2.2集 宮崎縣文化財調査報告書第2.2集			
4 昭54-1号 不明			美術 自然石	門 圓方鏡 自然石	平入上片袖方形 二方以上 圓方鏡 自然石	西-東	不 明	昭54.5.8 ~5.9	「日守地下式古墳」(54-1号) 宮崎縣文化財調査報告書第2.2集 昭5.5.3		
5 昭54-2号 刀子1, 貝輪1, 例 鋸齒(詳細不明)			美術 自然石	平入左片袖方形 二方以上 圓方鏡 自然石	西-東	3 体?					
6 昭54-3号 刀2, 鋸齒2			美術 自然石	平入右片袖方形 三方鏡 自然石	北西-南東	1 体	昭54.6.7 ~6.9				
7 昭54-4号 刀子1, 鋸齒1			美術 自然石	平入左片袖方形 四方鏡 自然石	南西-北東	2 体?					
8 昭55-1号 劍1, 鋸齒2, 貝輪4			美術 自然石	平入左片袖方形 三方鏡 自然石	南西-北東	3 体 (小兒骨)	昭55.7.7 ~7.12	「日守地下式古墳群発掘調査」(55-1号) 宮崎縣文化財調査報告書第2.3集 昭5.6.3			
9 昭55-2号 劍4, 刀子3, 鋸齒16, 鉗2, 鋸齒2, 貝輪16			美術 自然石	平入右片袖方形 四方鏡 自然石	西-東	2 体					
10 昭55-3号 刀子1			?	半入右片袖方形 一方鏡 自然石	北西-南東	不 明					
11 昭55-4号 刀			美術 自然石	平入左片袖方形 四方鏡 自然石	北東-南西	不 明					

次いで、昭和 55 年 7 月、前年の继续土取りによって隣接畠地との境界が生じたが、法面に当る部分から 4 基発見され、高原町教育委員会によって発掘調査が行われた。この 4 基とともに「片袖」玄室である。1 号の埋葬人骨は 3 体であったが、女性骨の腹部に幼児骨が抱かれるように葬られ遺存していたことは、地下式古墳調査例としては稀有のことであろう。2 号の玄室壁面には朱による彩色文があり、4 号玄室は全面朱塗りであることなど、地下式古墳研究上「装飾」について再検討する必要があると考えられる。3・4 号は副葬品が稀薄で規模も小さく、小児用であろうか。

注 1 「九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」宮崎県教育委員会 昭 44

注 2 黒木昭三氏の報告によると、壁面に彩色文様が見られる。

### III 調査経過

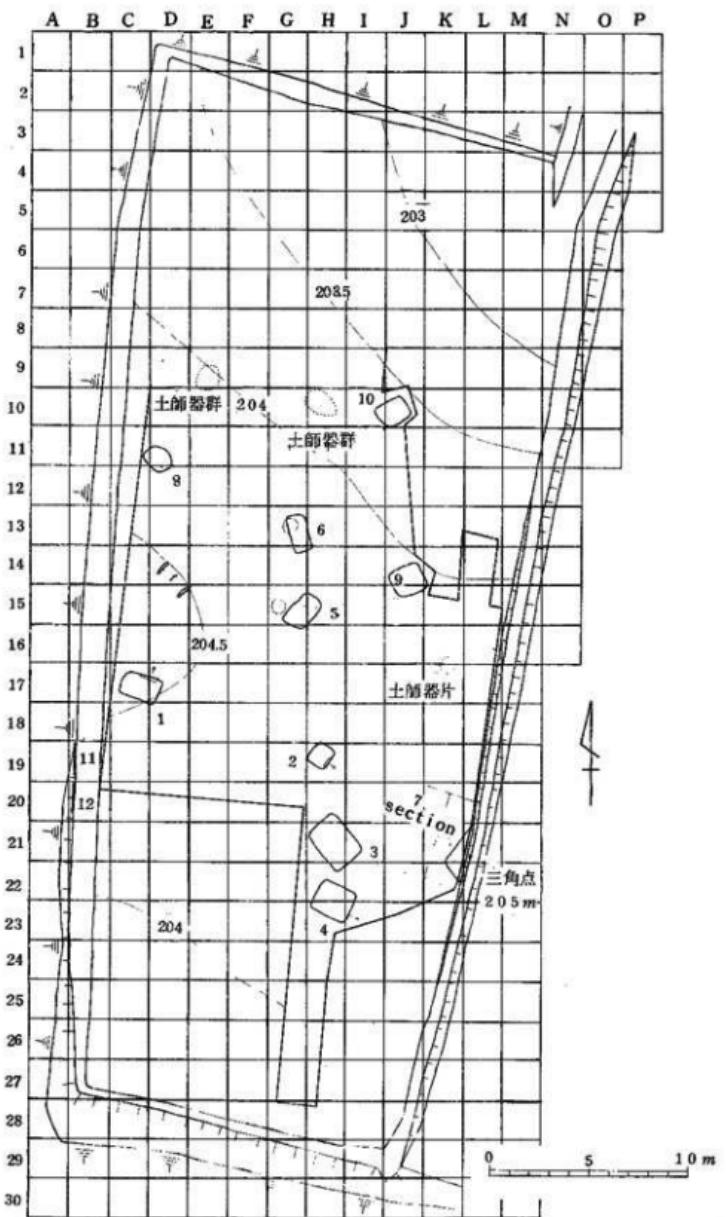
調査は、高原町教育委員会の協力を得て、県教育委員会が調査主体者となり、昭和 56 年 3 月 9 日から同月 18 日まで実施した。調査担当者を文化課主任主事岩永哲夫とし、調査指導として、県文化財保護審議会委員石川恒太郎、寺原俊文、遠藤尚（宮崎大学教育学部教授）の三氏の参加を得た。

なお、調査に際し、土地所有者太鼓穂氏には多大な御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

調査対象地は、54・55 年度に発掘調査を行った東側畠地約 1,200 m<sup>2</sup>（西諸県郡高原町大字後川内 1-118 番地）であったが、結果的には畠地の中央部分約 440 m<sup>2</sup> の調査に留まった。それは地形的に畠地の中央部が最も高位で、南北が低くなる窪鉢状を呈しているため、中央付近においては、堅坑上面までの表土が浅く、容易に位置を確認することができたのに対し、南北方向は耕土に統く黒土層が急速に厚くなつて採土が困難となつたためである。また、中央付近で相当数の堅坑部を確認し得たことで、所期の目的はある程度達したものと考えられ、更に、調査を進める中で堅坑上面及び周辺に土師器の存在を認めることができたこともあり、今回の予定調査期間内では当時のいわゆる墓前祭祀的遺構の確認を含め精査することは不可能であり、周囲について今回は手を加えるべきでないとの判断をなし、前記面積に留めたものである。

### IV 調査結果

調査対象面積約 1,200 m<sup>2</sup> に対し、地下式古墳の堅坑を検出し、基數把握を目的として調



第2図 日守地下式古墳群分布図 (1~12番号を示す)  
土師器片

査を行ったが、発掘面積約440m<sup>2</sup>の内に含まれる基数は10基であった。しかし、一昨年の採土作業により西側崖面に2ヶ所の遺構断面が観察できたことから、ここでは総数12基の地下式古墳を確認したと言ってよからう（第2図）。

堅坑番号は1から10まで発見順に付している。

### 1. 遺構

遺構として確認したものは、地下式古墳の堅坑部と不明遺構1ヶ所である。

#### (1) 1号地下式古墳（第3図）

堅坑は長径200cm、短径130cmの方形状をなし、北側長辺に渓道を穿っている。閉塞石はなく、渓門幅は92cmを測る。堅坑上部に土師器片がみられた。

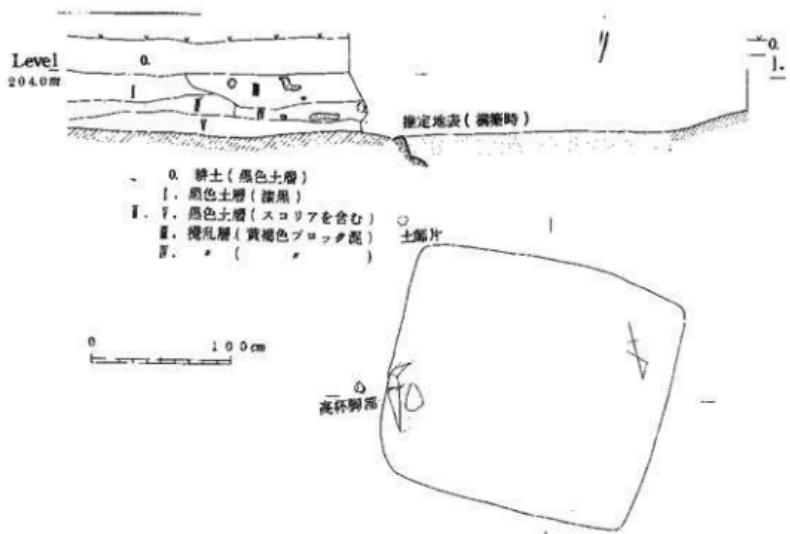
北側断面において、土層を観察すると、0層<耕土（黒色土層）16cm>、Ⅰ層<黒色土層（わずかなスコリアを含んでいる）22cm>、Ⅱ層<黒褐色土層29cm>、Ⅲ層<黄褐色土層30cm>、Ⅳ層<赤ホヤ層（第1オレンジと呼ばれるものである）>と続いている。堅坑の掘り面はⅠ層途中からと思われる。

#### (2) 4号地下式古墳（第4図）

堅坑は、長径198cm、短径180cmの隅丸方形をなし、南東側の壁に板石が検出されたことから、渓門を開塞している石であり、同方位に渓門を穿っているものとみられる。表土から堅坑上面まで約70cmを測るが、層位観察の結果、表土下約60cmの黒色土層上面が当



第3図 1号地下式古墳実測図



第4図 4号地下式古墳実測図(整坑部)

時の地表であり、掘り始め位置であったものと考えられる。

第4図における玄室上部の土層の内、Ⅲ・Ⅳ層中に下層の赤ホヤがブロック状に混在することは、蓋し竪坑掘削により生じた掘り上げ搅乱土であり、現在の畠地に所在するが為に上層は削平され、また一部層序に不明瞭な部分はあるものの、極めて小規模ながらいわゆる塚土(墳丘)の存在を示すものといえよう。更に、閉塞石寄りの盲層中に高杯脚柱部が発見されたことも注目すべき事実である。

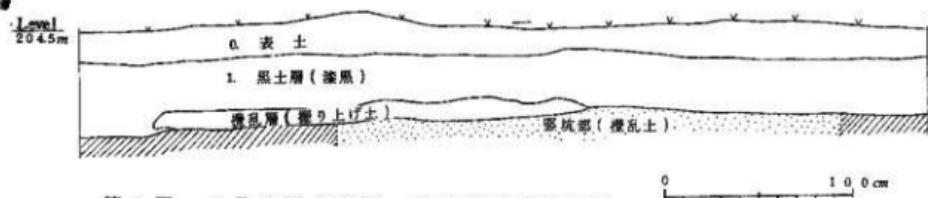
#### (3) 7号地下式古墳(第5図)

7号竪坑は一段低位の隣畠との境界に所在し、既に設置されている三角点の真下にあたるため、整坑の規模は不明である。

4号において見られた掘り上げ土の広がりがⅠ層の途中表土から約40cmの位置に薄く検出されたが、Ⅰ層は火山灰の自然地積と思われ、東側断面で観察した限られた範囲内では顕著な盛土と認められるものではなかった。

#### (4) 不明遺構

1号と8号のほぼ中間地点から剣を中心位に埋置し、両側に各長さ8.0cm、幅1.5cm、深さ3.0cmほどの掘り込みを設けた遺構が発見された。整坑検出を主眼にしていた関係上、十分



第5図 7号地下式古墳 堅坑部壁面実測図

な精査にまで至らなかったが、内掘込み間は約15.0cmを測り、木棺墓と考えるのが妥当かも知れない。地下式古墳群に混在する形での出土であり、墓群構成上興味深い。

## 2. 遺物

出土遺物はほとんど土器であり、他に鉄器4点が出土した。

### (1) 土器

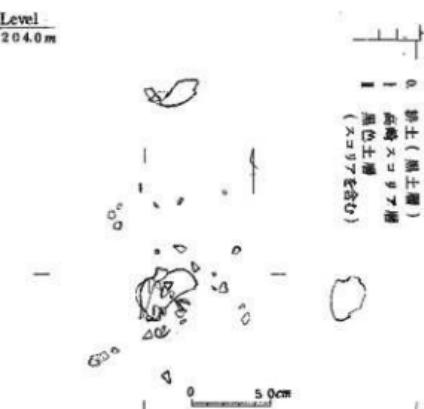
地下式古墳の1号から10号までの内、2・6号を除いて全ての堅坑上部から土器が検出された。しかし、その多くが破片であり、

接合できる破片が比較的距離を置いて出土しているなど原位置を移動している可能性も窺われ、土器と地下式古墳の関係を各々明確に把握するまでに至らなかった。

堅坑外では、E-9及びH-10区において一定のまとまりをもって出土したが、E-9区の土器は菱形土器1個体分、H-10区は高杯2個体分をそれぞれ中心にしたものであって土器群と言える程のものではない。その他、全般的に上部器片を散見することができた。

### 高杯（第8図）

1は4号堅坑上部から出土したもので、



第6図 E-9区土器群実測図

杯部口径 12.0 cm, 器高 9.0 cm, 脚端部  
径 13.2 cm の端正な小型品である。杯部  
は緩やかに内湾しながら開き、端部は丸  
くおさめる。脚柱部は裾部との屈曲を有  
せず、達続的にラッパ状に開いている。  
極めて安定感が高い。杯部内面はナデ、  
外面は斜位に刷毛調整した後、端部は横  
ナデしている。脚柱部外面は縦位にヘラ  
磨き、内面はヘラ削りを行い、裾部は外  
面横ナデ、内面に刷毛調整痕を残してい  
る。

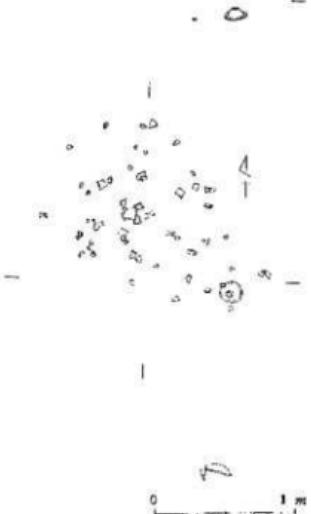
2 は 4 号祭祀坑近くで出土し、接合する  
破片の一部は E-9 区出土である。底部  
から体部にかけて屈曲した杯部であり、  
推定口径約 3.0 cm, 内面はヘラ磨きし、  
外面は刷毛調整である。3 は 4 号の墓道  
上部に当るとみられる直層（擾乱層）か  
ら出土した脚柱部分である。杯部は前述  
2 ではないかと思われる。外面は縦位の  
ヘラ磨き、内面は縦位のヘラ削りである。

4・5 は H-10 区出土である。4 は杯部口径約 2.7 cm, 器高 21.5 cm, 脚端部径 16.0  
cm を測る。杯部はその下底部に近く弱い稜をつくりだし、大きく外反している。脚柱は杯部  
との接点で最もくびれ、中膨らみをなし、脚端部は内湾している。杯内面はヘラ磨きを施し  
ているが、外面は刷毛目痕を斜位に良く残している。脚柱外面は縦にヘラ磨き、裾部も同じく  
ヘラ磨きを行っている。内面は脚柱ヘラ削り、裾部は刷毛目調整である。5 は裾部にあり  
て、脚端部径 15.0 cm を測る。焼成が脆いため器面風化がみられるが、内外面とも刷毛調整  
である。

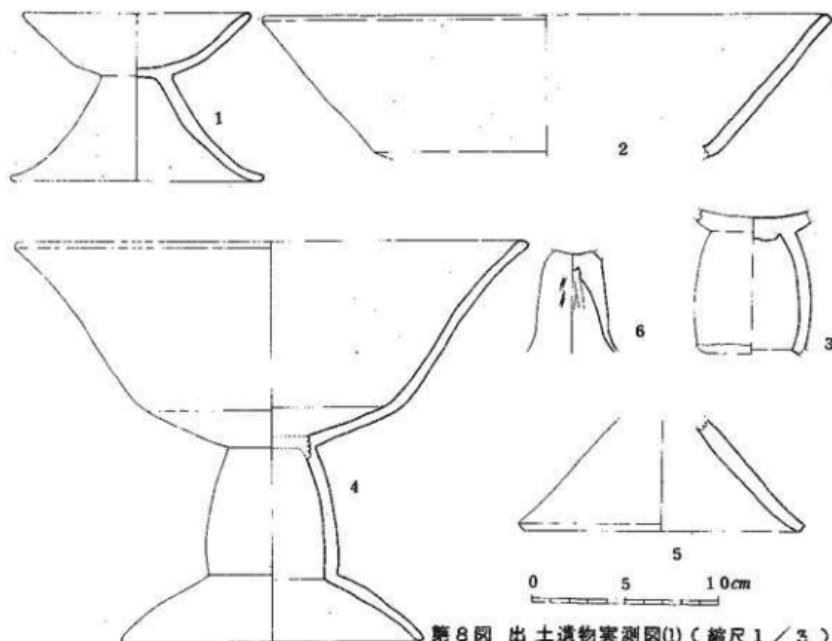
6 は小型の脚柱部で外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り調整である。焼成普通。

#### その他の土器（第 9 図）

Level  
20.85m

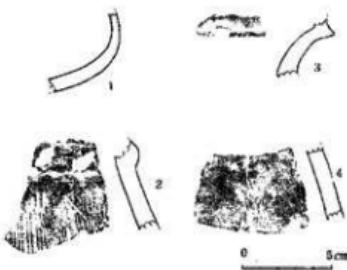


第 7 図 H-10 区土器群実測図



第8図 出土遺物実測図(1) (縮尺1/3)

1はGH-9出土のもので、長頸壺の  
胴部から底部にかけてであろう。薄手で  
焼成は脆い。2は9号墳坑上部出土の成  
川系土器片である。縦縞突帯には布目を  
有した施文具によって施した斜めの太い  
押圧痕がみられる。突帯下には縦の刷毛  
目痕が残っている。焼成は脆く暗褐色を  
呈する。3・4は安国守系壺形土器片で、  
く字形口縁には数条を単位とする条痕を  
鋸歯状に施文している。胴部は縦に刷毛  
目調整痕が良く残っている。焼成良好。



第9図 出土遺物実測図(2) (縮尺1/3)

## 鉄器（第10図）

前項において不明遺構とした所から出土した剣2本、鉄鎌2本である。

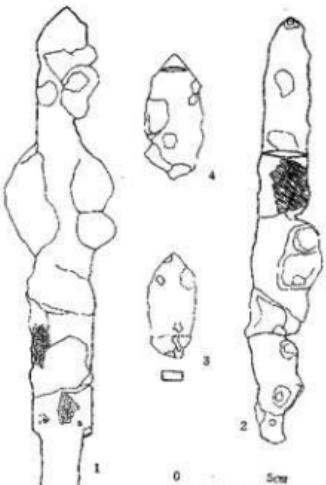
### 剣（1, 2）

1は総長27.9cm、刃幅3.2～3.5cmを測る。関節に近く2個の孔を穿っている。また、一部に布目痕が残存している。

2は総長28.4cm、剣身には木質を銹着している。

### 鉄鎌（3, 4）

ともに鎌身のみで、平根式である。



第10図  
出土遺物実測図(縮尺1/3)

## V 結 語

今回の日守地下式古墳群分布状況確認調査によって、約410m<sup>2</sup>の範囲内ではあったが、12基の存在を確認し得た。この高い密集度は地下式古墳の特徴であり、過去の調査例もそれを示している。この結果は、更に丘陵の南・北・東にも多数存在することを予測させるに十分なものである。先述したように既確認及び既調査の17基を合わせると、29基を数え、未確認基数を考慮するならば、えびの市小木原地下式古墳群、島内地下式古墳群、野尻町大萩地下式古墳群に次ぐ県内有数の地下式古墳群になる。

また、形態的には「西諸県型」とも言える片袖壁玄室を主とするが、その発生論、分布構造論を初め、多くの課題が残されている地下式古墳の研究上、重視され得べき内容を持つものであり、量的に確実に減少しつつある現状を顧みても遺跡の取り扱いについては、十分配慮する必要があるものと考えられる。

今回の調査では、堅坑上部及びE-9, H-10区を中心に土器を検出した。日守における調査例は工事中に発見されて調査したもののが全てであり、十分な調査を行う術が失われていたことにもよるが、地下式古墳との関連を知る土器の発見がなかった。玄室内から出土す

るのは日向中央部の地域であり、諸県地方では数少ない。しかし、堅坑上部やその周辺からの出土例は、えびの市灰塚遺跡<sup>(1)</sup>、小木原古墳<sup>(2)</sup>、小木原地下式A号墳<sup>(3)</sup>、馬頭地下式3号<sup>(4)</sup>、久見迫地下式7号<sup>(5)</sup>、高崎町繩瀬小学校校庭地下式古墳<sup>(6)</sup>、高原町旭台地下式3、13号<sup>(7)</sup>があり、いずれも祭祀的性格を持つものと考えられる。また、宮崎市下北方地下式4号<sup>(8)</sup>の堅坑上部から多くの土師器が出土しており、副葬品としての土器との関連で注目される。

日守出土の土師器は完形のものはなかったが、大小の高杯2点が復元でき、出土状況から復元可能な変形土器が1点あった。第8図4に示した高杯は、国富町六野原地下式3号、22号出土の高杯と共通した特徴を有し、杯部の形態は、灰塚遺跡、下北方地下式4号出土にも類似している。時期的には土師式土器編年の中期<sup>(9)</sup>、関東地方和泉期に相当するものと思われる。また、第8図1の小型高杯は県内においては出土例がなく、4号地下式古墳との関連の上でも注意すべき遺物である。

次に土器と地下式古墳の関係であるが、出土地点が堅坑上部及び付近のものは当該造構に関わるものと認められるが、E-9、H-10区出土については、果してどの造構に伴うものかは速断できず、あるいは造構をグループングできるものとするならば、ある特定のグループに対して共通の祭祀土器と考えるのが妥当かも知れない。

また、9号堅坑上部から成川系とみられる絡繩突帯土器片が1点出土している。高崎町上示野原遺跡<sup>(10)</sup>において出土した高杯は日守出土の高杯に類似し、共伴する遺物として絡繩突帯変形土器の出土がみられたことは、絡繩突帯土器を伴う住居跡と地下式古墳との関係を示唆しているようにも思われる。

注1. 17号地下式古墳（堅坑上部閉塞）の蓋石上から高杯が出土し、周辺からも高杯の杯部が出土している。

「灰塚遺跡」 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2) 宮崎県教育委員会 1973

注2. 円墳であるが、盛土中に主体部は認められず、地下式古墳を主体としている。

「小木原古墳」 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1) 宮崎県教育委員会 1972

注3. 「小木原地下式A号墳」注2同書

注4. 「馬頭遺跡」注2同書

注5. 「久見迫遺跡」注2同書

注6. 「高崎町繩瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集  
宮崎県教育委員会 昭47.3

注 7. 旭台山土器については、報告されていないが、地下式第3、13号の堅坑部から出土している。機会を得て報告する予定である。

「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第19集 宮崎県教育委員会  
昭52.3

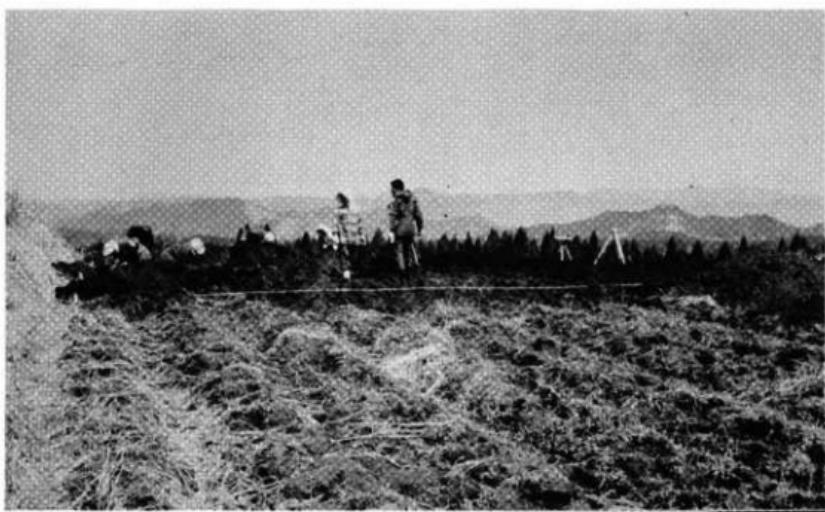
注 8. 「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集 宮崎県  
教育委員会 昭47.3

注 9. 「上師式土器集成」本編2 杉原莊介・大塚初重編 昭46

注10. 「上示野原遺跡発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集 宮崎県教育委員会  
昭55.3



(1) 遺 跡 遠 景



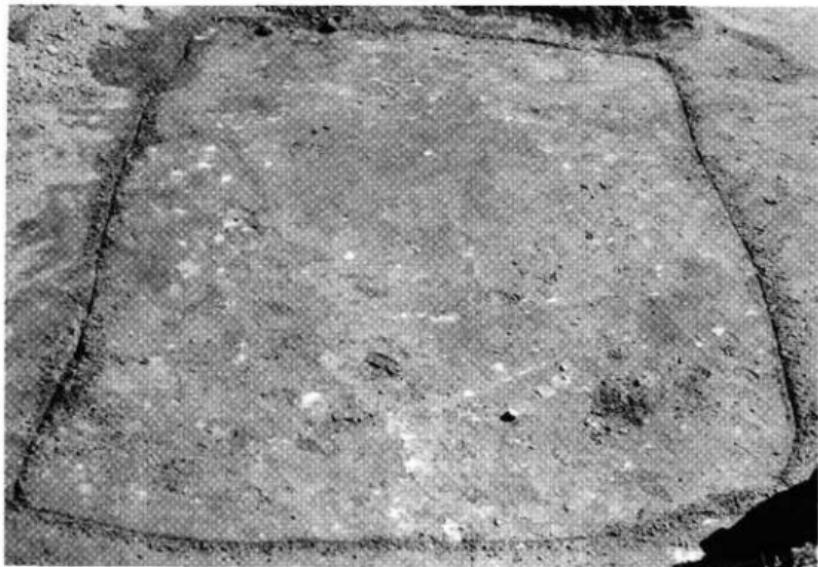
(2) 発 挖 作 業 状 況



(1) 1号地下式古墳竖坑



(2) 2号地下式古墳竖坑



(1) 3号地下式古墳竖坑



(2) 剥出 土 状 況



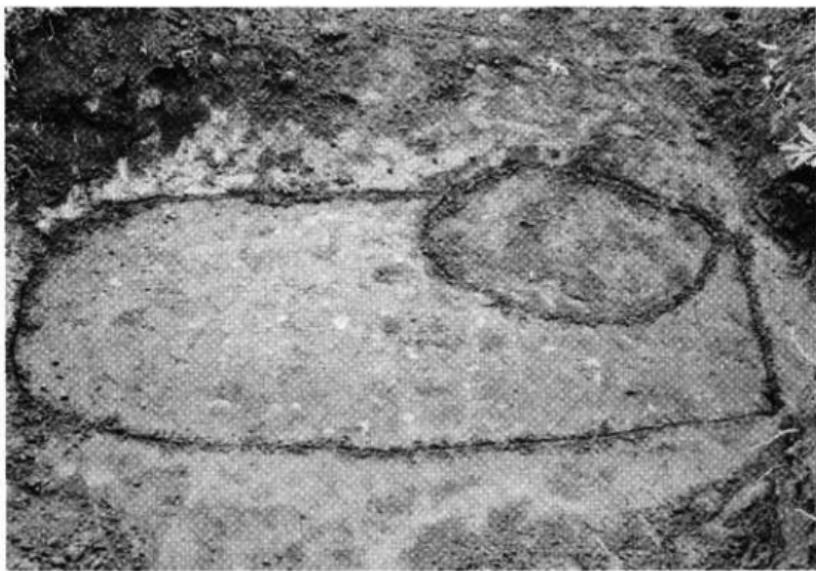
(1) 4号地下式古墳竖坑



(2) 4号玄室上部土層状况



(1) 5号地下式古墳竪坑



(2) 6号地下式古墳竪坑



(1) 7号地下式古墳竪坑



(2) 高杯出土状況(H-10区)



図版 7  
—71—



出土遺物 (1)



出 土 遺 物 (2)





1. 遠 景



2. 近 景



## (付論)

### 宮崎県西諸県郡高原町日守遺跡の地形的・地質的背景

宮崎大学教育学部 遠藤 尚

#### 1. はじめに

日守遺跡は、高原から後川内へ通ずる道路の北側、町の中心から東に約4畳の地点にある。この地点で、人骨を作り地下式古墳が発見され、最初に調査が行なわれたのは1979年5月であるが、81年3月の古墳群確認調査に際して、現地を見学する機会を得たので、その結果を報告する。

この報告では、群をなす古墳を残した人達の生活の場という観点から、かなり広い範囲について記述した。日守遺跡の近傍については、詳しい野外調査ができなかつたので、岩瀬川の北側(野尻町)、小林-高原間の国道221号線の西側、および高城町・都城市周縁での知見を土台として、空中写真の実体視から判断した。

空中写真は4万分の1縮着を使用し、判読結果を2万5千分の1地形図に記録したもの、5万分の1地形図に縮小転写した。使用した地形図は、5万分の1「野尻」・「霧島山」、2万5千分の1「高原」・「日向小林」・「高崎新田」・「高千穂峰」である。

この調査に際して色々お世話をいただいた、高原町教育委員会森長弘・宮崎県文化課岩永哲夫の両氏にお礼申し上げる。



第1図 宮崎県西・北諸県地方の山地と凹地

遠藤・他：20万分の1土地分類図（宮崎県）より。

破線部は、米谷・他による 同上（鹿児島県）より。

- 1：岡ノ城，2：瀬戸ノ口，3：猿瀬，4：轟，5：霞原，6：高崎新田，7：木下，  
 8：長尾山，9：星尾山，10：四方面山，11：荒妻，12：尾首山，13：瓶臺山，  
 14：白鹿岳，15：有水，16：青井岳，×：日守遺跡。

## 2. 遺跡周辺における山地と凹地の配列

宮崎県の北半部を占める九州山地と、南部にある南那珂山地とは比較的高峻であるが、これら両山地に挟まれて、比較的起伏の小さな地帯が拡がっている(第1図)。

この小起伏地帯の基盤を構成するものは、南・北の両山地と同じく四万十帯に属する岩層であるが、かなり擾乱を受けていて、鱗片状の上り面が発達した、剪断泥岩ともいべき頁岩が優勢な地層であって、比較的低い(海拔300~400m以下の)丘陵状山地を作っている。この丘陵状山地を諸県山地と呼ぶ。

九州山地は野尻町附近で南に張り出し、南那珂山地は青井橋附近において北に張り出している。これら二つの張り出しに挟まれた部分の諸県山地は、その北端部で、東西にわたって断ち切られてはいるが、紙尾から青井橋までつながって、その東方に拡がる宮崎平野の西縁を画している。都城から北流してきた大淀川は、上記の断絶部で、岩瀬川を合せるとともに向きを東に変えて、宮崎平野の西縁部に開口している。

大淀川の北流部分より西の諸県山地は、北西から南東に平行して走る多くの谷や凹地帯に断たれ、北西-南東に細長く続く山背を平行させながら、全体として北東から南西に雁行して連なり、瓶臺山-白鹿山の連山とつながって、都城・国分・小林の3凹地帯の境となっている。そのうち最も北東にあるものは、前記した九州山地の張り出した部分の西端に位置する岡ノ城と、瀬戸ノロの鞍部で接し、岩瀬川・高崎町江平-笛水の鞍部・大淀川などで断ち切られながらも南東に伸び、先に述べた紙尾-青井橋の山地に続き、九州山地との間に野尻の盆地を抱いている。岩瀬川・大淀川がこの山地を貫流している所には、猿瀬・蟲の狭隘部がある。

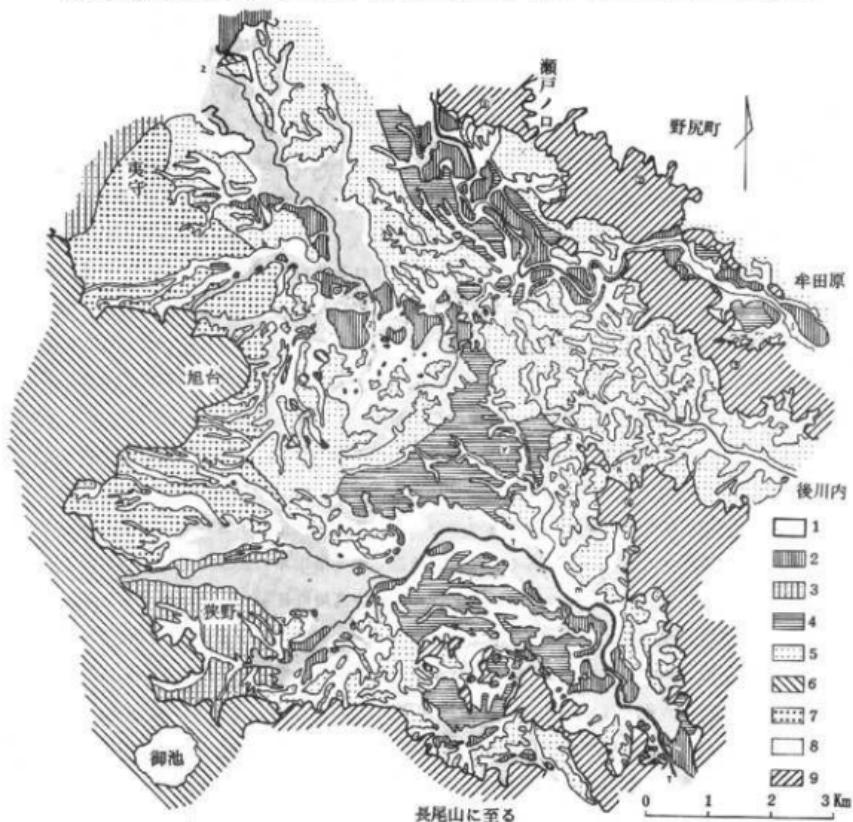
第二の列は、高原町露原から高崎新田の東方に続くもので、第一列との間に後川内の凹地帯を挟んでいる。この山列は南東に向かって分岐し、木下などの谷を挟むとともに、断片化し、江平・鶴瀬の低所を抱きながら、都城の盆地に移り変っている。日守遺跡は、この山列の北西縁に位置している。

高崎川に沿う凹地帯で第二の山列から隔てられている部分の諸県山地は、南西に向かって高度を増しながら、長尾山・星尾山-四方面山など山田町の北部を占める第三列、都城市西岳町の北部を荒巻から尾首山に続く第四列を経て、瓶臺山(548.0)に至る。

この部分の諸県山地の北西縁は、霧島火山の熔岩流に接するか、または覆われている。霧島火山は、ここから北および北西に連なり、前記した山地との間に、小林-高原の凹地を抱いている。九州山地の西端には、台地性熔岩を乗せる肥薩火山の一部があって、霧島火山との間に加久藤-吉松の凹地を作っている。

### 3. 凹地域の埋積

山地の特徴が斜面であるとすれば、凹地域の特徴は、各種の平坦面にあるといえる。この



第2図 日守遺跡周辺の地形・地質区分図

1：低地（泥濘原および谷底の平地），2：Ⅰ面（河岸段丘），3：Ⅰ面と同時の扇状地面，4：Ⅱ面，5：Ⅱ面（シラス台地面），6：霧島火山熔岩類，7：Ⅱ面に当る扇状地面，8：台地・段丘の斜面，9：四五十層群よりなる山地

I : 岩瀬川, T : 高崎川, Z : 辻ノ堂川, h : 広原駅, t : 高原駅, m : 日向田駅, a : 阿母ヶ平, Y : 横打, k : 置原, u : 梅ヶ久保, X : 日守遺跡

①: 三角点 365.3 國ノ城, ②: 三角点 342.1, ③: 三角点 293.8, ④: 三角点 348.9

地域で著しく目につく平坦面はシラス台地面である(第2図)。この地域でシラス台地を作っているシラス層は、主として、始良火山噴出物のうち末期の入戸軽石流堆積物であって、測定された噴出年代は幅があるが、 $16350 \pm 350 \sim 26000 \pm 695$  C<sup>14</sup>年前とされている。

第三紀の終り頃、四万十帯に属する岩層から構成された山地が分裂・断片化して、その間に凹地が形成され始めてから以来、これらの凹地は各種の堆積物で埋積されてきた。山地の麓には扇状地が作られ(都城凹地の東半部・紙屋の東方など)、凹地の中心には湖成層が堆積した(野尻-紙屋、および加久藤-吉松など)。そのほか、小林軽石流(野尻-紙屋)・加久藤火砕流(小林・紙屋・都城・財部・国分)など、大規模な火山活動に伴う噴出物が広い範囲にわたって堆積するとともに、霧島火山の麓(蓮太郎温泉・祐川内など)では、旧期の活動に伴う噴出物が流下・堆積した。このようにして凹地が埋積されて来た最終段階が、入戸軽石流の堆積であり、その結果、相隔てられた凹地底が、略々同じ高さをもつシラス層によって埋めつくされた。この面をⅢ面と呼ぶ。

シラス層の堆積直前に、古い霧島火山の東麓には扇状地が作られており、小林市夷守から高原の西部にかけて、現在でも開析扇状地として残存している(高原扇状地)。夷守岳の形成はその直後であり、その噴出物(夷守スコリア)は高原扇状地の表面を覆っているほか、遠く東方の宮崎平野地域にも分布している(宮崎平野では、これを「オコシ」と呼んでいる)。入戸軽石流堆積物の表面はⅢ面を作っているが、その基底は、夷守スコリアを敷いて高原扇状地にのし上っている。従って、高原扇状地の形成はⅢ面より古い(これをⅡ面とする)。高原扇状地の西方にある旭台・瀬田尾の台地は、熔岩流よりなる台地であるが、この熔岩流は高原扇状地の上に乗っており、末端部の熔岩流の間に、入戸軽石流の基底に伴う軽石層(大隅降下軽石層)を挟んでいるので、これらの熔岩台地の形成は、Ⅲ面の形成と略々同時期である。大隅降下軽石層直下の黒泥を使って測定された年代は $22000 \pm 850$  C<sup>14</sup>年前であり、先に記した入戸軽石流の測定年代の上・下限の中間の値を示している。

#### 4. 凹地底の段丘化

凹地を埋めたシラス層は、その後、流水による開析を受け、シラス台地が形成されるとともに、川沿いには段丘が作られて来た。

Ⅲ面の現在の海拔高度は、大体のところ、次の通りである。加久藤(300m)、小林・高原(220m)、梅ヶ久保(200m)、日守遺跡(195m)、後川内(180m)、江平(160m)、都城(250m)、高崎新田(170m)、瀬戸ノ口(200m)、野尻

(170 m)。大観して、南から北に、西から東に徐々に低下している。たゞし、ここでⅢ面としたものには、シラス層の堆積した表面がそのまま残っているものと、いくらか流水に洗われて、シラス層の上に薄い砂礫層を乗せているものとがある。上記したⅢ面の傾きは、一つには軽石流の流下方向を反映しているのであろうが、他方では、その表面を洗った流水の流下方向をも反映しているものと考えている。

都城・高崎から高崎にかけて、Ⅲ面より一段低い位置に、かなり広い分布を示す平坦面がある。都城の周辺では、シラス層の上に、厚さ10m以上の、シラス層から由来した砂・泥層が乗って、シラス台地より一段低く、平坦な台地を作っている(月野原・蓑原など)。この地層を成層シラス層、その台地を成層シラス台地と呼んでおく。

成層シラス層は、シラス層が堆積した後、都城地域に生じた浅い湖の堆積物であるが、シラス台地や山地に近づくと、薄くなり、三角洲性あるいは扇状地性の疊層に移り変わる。成層シラス層・成層シラス台地の存在は、高崎町有水・高崎町龍瀬まで、野外で追跡し、確認しているが、それ以北については、現在の所、野外での資料をもたない。たゞ、空中写真の実体視によって、Ⅲ面より幾らか低い平坦面の存在が認められる。この面は、湖底面というよりは、Ⅲ面を少し削った河床面あるいは扇状地面のように見受けられるが、都城地域の成層シラス台地面に対応するものであろうと考えている。第2図には、この面はⅢ'面として図示してある。第2図の範囲では、Ⅲ'面に乗る成層シラス層に当るものは薄く、その下にはシラス層があるので、Ⅲ'面はⅢ面とともに、広い意味でのシラス台地面と見做すことができる。

この地域におけるⅢ'面の、大体の海拔高度は次の通りである。加久藤(280m)、小林(197m)、高原(210m)、梅ヶ久保(180m)、日守遺跡(188m)、後川内(存在を認めず)、江平(150m)、都城(170-160m)、高崎新出(160m)、瀬戸ノ口(柿川内で179m)、野尻(160m)。Ⅲ面との比高は、かなり大きい都城附近(90~80m)を除き、一般に20~10mである。

Ⅲ・Ⅲ'面は流水によって侵蝕され、台地を貫流する河川の両側や、台地に喰い込んでいる谷床に、平地が形成されている。これらのうち最低位にある平坦面をⅠ面とする。Ⅰ面は、一般に冲積面と呼ばれているものである。河川の両側では、高崎川、および温水以北の辻の堂川に沿って広い氾濫原が形成されているほか、霧島火山の麓では扇状地的性質を示している(辻の堂川湾津附近・高崎川蒲牟田および湯の元附近など)。

シラス層の下には、夷守スコリアを伴う火山灰層(古期ローム層)が水平に敷かれていることがあり、この場合、古期ローム層に沿って、Ⅰ面が形成されていることが多い。また、

古期ローム層が地面と交わる所には、往々にして湧水があり（例えば小林市千谷），また、シラス台地に喰い込む谷の奥でも、このタイプの湧水が少くない。

Ⅲ'面以後、Ⅰ面以前に形成された段丘面をⅡ面とする。これには、沖積面からの比高が違う幾段かの面があるが、第2図では一括して示してある。Ⅱ面としたもののうち高位のものは洪積世に形成されたが、低位のものの中には、沖積世に作られたものもあると考えている。

Ⅱ面は、岩瀬川・温水附近の辻の堂川・高崎川にそって発達しているが、細野や狭野附近には、Ⅱ面に当る扇状地も作られている。

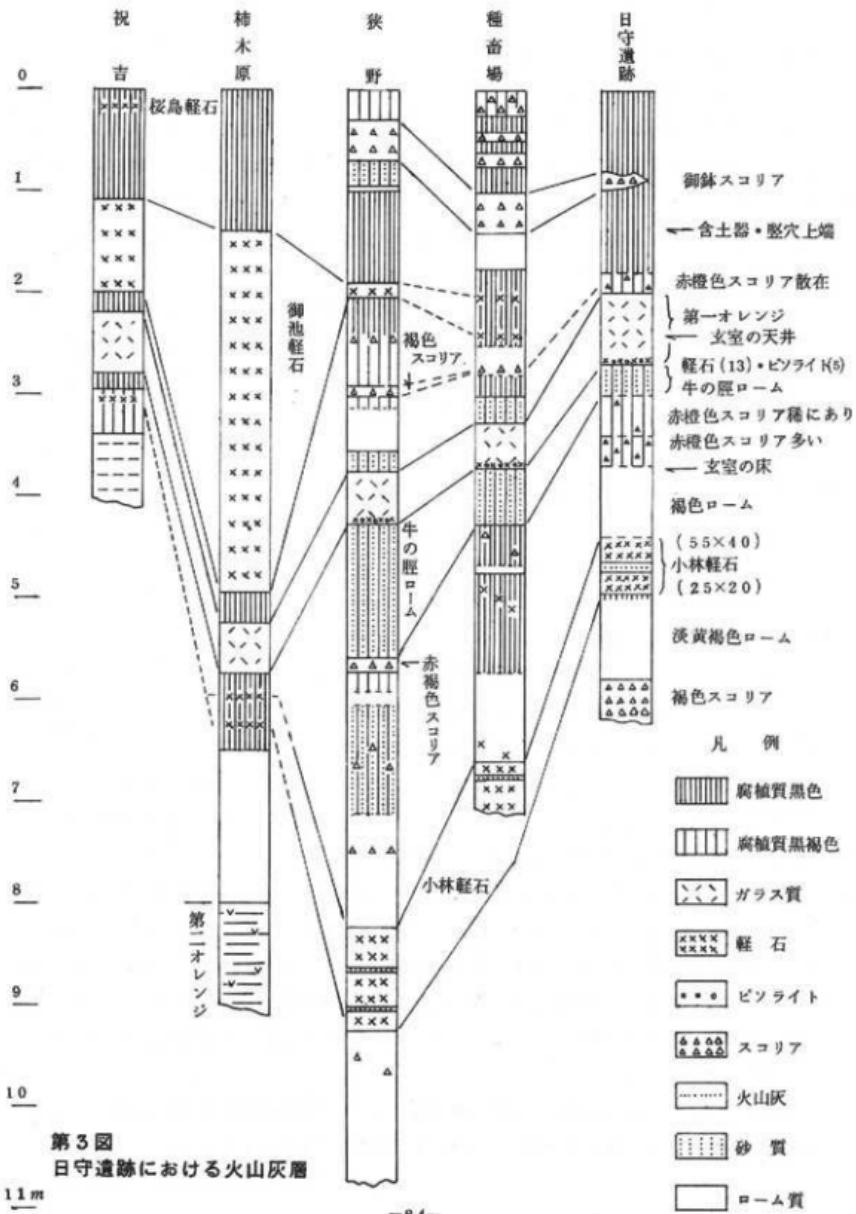
以上を要約すれば、門地埋積の末期に、現在の霧島火山東麓に当る所に扇状地があり（高原扇状地）、夷守火山の活動・形成の後、姶良火山の活動による軽石の堆積（大隅降下軽石屑）につぐ軽石の流下（入戸軽石流）によって、凹地の埋積は完了した。流水の洗い流しによってⅢ面-Ⅱ面が作られた後、河川の下刻作用が強まり、川沿いに段丘を残しながらのシラス台地化と、小谷によるシラス台地の蚕食が行われつつ、最低位のⅠ面が形成された。Ⅰ面は一般には氾濫原性の面であるが、細野・狭野附近では、扇状地的性格を示している。第2図の範囲内の岩瀬川に沿っては、Ⅰ面は殆ど発達していない。日守遺跡の古墳群が作られた当時の地形は、略々現在の地形に近いものであった。

## 5. 日守遺跡について

日守遺跡は、岩瀬川と高崎川との間に挟まれたシラス台地上にある。このシラス台地は、西方には高原の街区を経て高原扇状地に、東方には後川内のシラス台地に連続してはいるが、台地面は、細かく分岐しながら細長く伸びる谷で割まれていて、複雑な平面形を呈している。これらの谷のうち遺跡の近くにあるものは、後川内の凹地を流れる炭床川の谷とその支谷、高崎町谷川附近から北に伸びる谷とその支谷であって、その谷底にはⅠ面に属する平地が細長く続いている。現在は水田として利用されている。

遺跡附近にあるシラス台地の表面は、完全な平坦面ではなく、僅かな傾斜をもつ緩やかな凹凸を示しており、古墳群はその内部の一つに作られている（図版-1）。遺跡の南東には、第二列目の諸県山地がある。その平面形から、谷や尾根を持つ山地の下半部が、シラス層によって埋没していることが推定される。従って遺跡近傍の緩やかな凹凸は、シラス層下に埋没した古い地表面の凹凸を反映したもので、凸部の下には、古い地表面の凸部が埋まっているものと考えている。

遺跡の西方には、幾らか低い、より平坦な面があって、高原の街区の南まで拡がっている。この面の性格は、よく判らないが、今の所、Ⅱ面に当るものとしておく。



第3図  
日守遺跡における火山灰層

11m

地下式古墳は、シラス台地をおく火山灰層（新期ローム層）の中に掘られている（図版-2）。第3図には、現地で見られる火山灰層の断面に、80年7月に発掘された玄室の位置と、今回確認された堅穴上端の位置とが記入されている。

このうち、第一オレンジとしたものは、俗にアカホヤと呼ばれているもので、その測定された年代は、 $6,050 \pm 110$ ～ $6,400 \pm 110$  C<sup>14</sup>年前とされている。御鉢スコリアの年代は未定であるが、788年に黒色のスコリアを2尺ほど、近郊に堆積したことがあるといわれる。

第3図には都城市祝吉（Ⅰ面）・山田町柿木原（Ⅱ面）・高原町狭野（Ⅲ面）および高原種畜場（Ⅳ面）で見られた新期ローム層の断面を附け加えてある。柿木原の第二オレンジは、始良Tn火山灰と呼ぶ向きもあるが、Ⅱ面およびⅢ'面の特徴となるものである。日守・種畜場で見られる小林軽石はⅡ面を特徴づけるものであるが、柿木原・祝吉では不明瞭である。祝吉・柿木原で見られる御池軽石は、高原町狭野あたりまで明瞭であるが、種畜場・日守では不明瞭である。御池軽石層の中からは、龜文後期の土器が出土したという。

そのほか鍵層になりそうなものに、御鉢スコリア上の2～3枚のスコリア層（種畜場）、御池軽石と第一オレンジとの間の褐色スコリア層（狭野）、牛の脛ロームの下の赤褐色スコリア層（狭野）、小林軽石の下の褐色スコリア層（日守）などがあるが、それらの噴出源や噴出年代については未定である。特に上位のものについては、今後この地域で出土する遺物との対比が期待される。

日守遺跡において、地下式古墳の堅穴上端と、それに伴う遺物の包含層は、御鉢スコリア以前、第一オレンジ以後（恐らくは、狭野における褐色スコリア以後）の黒色土の中にあって、見るべき鍵層が欠落している。遺物包含層の下位にあると思われる御池軽石も、はっきりしていない。たゞ、遺物包含層の上と下とでは、肉眼的に僅かな違いが感ぜられる。その違いは、たゞ何となく違っていて、言葉では表わし難いのであるが、例えば、土を一つまみ指先に採り、白紙になすりつけた際の色調が違っている。

古墳群確認調査のための発掘現場の3箇所で、御鉢スコリア以下の土層断面から、5cm間隔で採取した試料につき、標準土色帳と比べて次の結果を得た。前・後の値は包含層の上・下を意味している。（7.5YR 2/2+2/3），（10YR 2/2+2/3），（10YR 3/2+3/3）。

概括的には、上はより黒味が強く、下はより茶色味が強いと言える。その理由はよく判らないが、腐植の重合度の違いによるものかも知れない。もしそうであれば、腐植の重合度は、

土層対比の際の一つの指標となるであろう。沖積世と洪積世との境は、略々、狭野における牛の脛ロームの下の赤褐色スコリア附近と考えている。

別表に以上を要約しておいた。

表

I面	一川沿いの氾濫原・澗津・湯之元～蒲牟田の扇状地	台地を刻む小谷底の平地	
	段丘形成	御鉢スコリア 日守遺跡→ 御池軽石 第一オレンジ	(788年) (縄紋後期) (約6000年前)
		シラス台地化	冲積世
II面	河岸段丘・細野・狭野の扇状地	小林軽石	洪積世
III面		第二オレンジ	
IV面	門地の埋積完了	III面を10～20m削る	
V面	澗田尾・炮台の熔岩流	入戸軽石流 大鍋降下軽石 夷守岳スコリア・古期ローム	(約20000年前)
VI面	高原扇状地	凹地の埋積 加久藤火碎流 小林軽石流	第三紀末
		凹地の形成	

## 参考文献

- 遠藤 尚 (1958)：宮崎県西諸県郡の段丘堆積物。宮崎大学学芸学部紀要, 4.
- (1963)：宮崎県中部の段丘を覆う火山灰層の層序学的研究。同上, 15~16.
- ・他(1969)：火山灰層による霧島熔岩類の編年(試論)。霧島山総合調査報告書。
- ・他(1974)：20万分の1土地分類図(宮崎県)のうち地形分類図および表層地質図。経済企画庁総合開発局。
- 伊田一善・他(1956)：宮崎県小林市附近天然ガス調査報告。地質調査所報告, 168.
- 宮地六美 (1965)：宮崎県西諸県郡高原地方の火山碎屑岩類。九州大学教養部地学研究報告, 12.
- 成瀬洋 (1966)：霧島火山東方の第四紀 Tephra. 資源科学研究所彙報, 66.
- 都北土地分類基本(1980)：5万分の1土地分類基本調査「都城」のうち地形分類図および表層地質図、宮崎県。
- 米谷静二・他(1971)：20万分の1土地分類図(鹿児島県)のうち地形分類図。経済企画庁総合開発局。
- 桑野幸大・他(1959)：大隅半島の地質(予報)。資源科学研究所彙報, 49.
- 沢村孝之助・他(1957)：5万分の1地質図幅説明書「霧島山」。地質調査所。

(1981年10月9日)



## 梯（かけはし）遺跡発掘調査

西諸県郡野尻町大字東麓440-36番地



## 例 言

1. 本報告は、昭和54年2月13日から17日まで県教育委員会が実施した梯遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、県総合博物館学芸課主事（現・県教育庁文化課主事）面高哲郎が担当した。
3. 本報告の執筆、編集には面高があたった。

## 本文目次

I 所在地	9 4
II 調査に至る経過	9 5
III 調査の結果	9 5
1 遺跡の概要	9 5
2 遺構	9 7
3 出土土器	1 0 0
IV 結語	1 0 2

## 挿図目次

第1図 遺跡所在地	9 4
第2図 梯遺跡基本層序	9 5
第3図 遺構分布図	9 6
第4図 第3, 4, 10, 11号集石遺構実測図	9 8
第5図 第9, 13, 19号集石遺構実測図	9 9
第6図 出土土器	1 0 1

## 図版目次

図版1 (1) 遺跡遠景(北から)	1 0 5
(2) 遺構分布状況(南から)	1 0 5
図版2 (1) 第2号集石遺構	1 0 6
(2) 第13号集石遺構	1 0 6

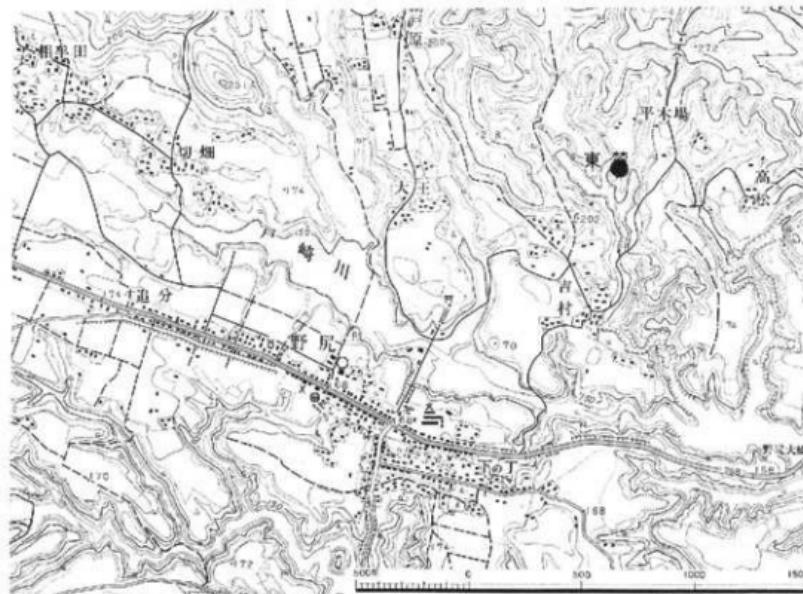
図版3 (1) 第9号集石遺構	107
(2) 第11号集石遺構	107
図版4 (1) 第19号集石遺構	108
(2) 同上	108
図版5 出土土器	109

## I 所在地

野尻町は、九州山地の南東裾部にあたり、東は宮崎平野、西は小林盆地に接している。同町内を流れる戸崎川、岩瀬川は、ほぼ東へ流路をとり、北流してきた大淀川と合流して日向灘へ注ぐ。これらの河川により南東裾部は侵蝕を受け、深い谷が形成され、分断化が進んでいるが、その頂部は平坦面ないし緩斜面となっており、台地や丘陵性台地が発達している。

梯遺跡は、野尻町役場北東 1.5 Km にある標高 175 m から 160 m へと緩やかに傾斜する丘陵性台地の南端に位置する。

同町内の遺跡には、縄文前期の柿川内第 1 遺跡<sup>註 1</sup>、弥生終末期の集落や土坑墓群<sup>註 2</sup>、および多數の地下式横穴の発見されている大荻遺跡等があり、いずれも台地上や丘陵性台地上で発見されている。遺跡の発見例は現在それほど多くはないが、地形的にも恵まれているので今後その数は増加すると思われる。<sup>註 3</sup>



第 1 図 遺跡所在地 (●印)

## II 調査に至る経過

昭和53年夏、奥村薰氏は所有する丘陵東緩斜面に位置する段差のある2枚の畑地を、1mほど削平し、1枚の畑地として造成を行った。8月4日、野尻町文化財保護委員真方良穂氏（現同町教育長）により畝跡と考えられる角礫の集石群2ヶ所が発見され、その後の町教育委員会の現地調査で、造成地東半で20箇所の集石群が確認された。集石群内では炭化物が認められ、押型文土器も発見され、集石群は縄文早～前期であることが判明した。

奥村氏は、54年3月以降、耕作を行う予定であったので発掘調査を行うことになった。調査は、県教育委員会が主体者となり、県総合博物館主事高哲郎の担当で、昭和54年2月13日から17日まで（計5日間）野尻町教育委員会の協力をえて実施された。

調査を快諾していただいた奥村薰氏、および調査期間中多大な協力をいただいた真方良穂氏に感謝いたします。

## II 調査の結果

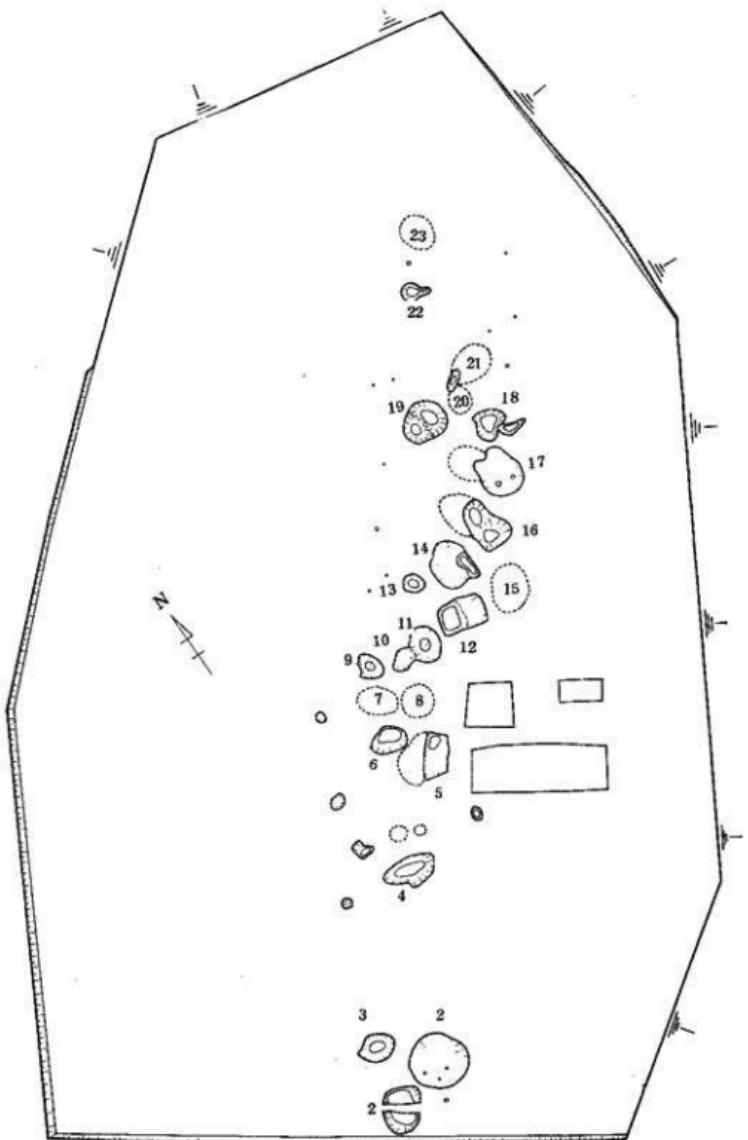
### 1. 遺跡の概要（第2、3図）

梯遺跡は、南方へ延びる丘陵性台地南端の東斜面で発見された。当地は、畑地造成により既に1mほど振り下げられ、西半では小林軽石層が、東半では暗褐色ローム層が露出しており、集石遺構は、暗褐色ローム層面で発見されている。梯遺跡の基本層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層明褐色土層、第Ⅲ層黄褐色火山灰層（通称アカホヤ）、第Ⅳ層灰青色火山灰層、第Ⅴ層暗褐色ローム層、第Ⅵ層小林軽石層となっている。

集石遺構は、23基発見され、幅7mの帶状に北東から南西方向に分布する。遺構間は、1m～2mと近接するが、分布状態から南西部の3

第Ⅰ層 表	土	( 30 cm )
第Ⅱ層 明褐色土層		( 20 cm )
第Ⅲ層 黄褐色火山灰層		( 25 cm ) （通称アカホヤ）
第Ⅳ層 灰青色火山灰層		( 15 cm )
第Ⅴ層 暗褐色ローム層		( 50 cm )
第Ⅵ層 小林軽石層		

第2図 梯遺跡基本層序



第3図 遺構分布図

1

0

10m

基と北東部の20基に大きく2群に分けられる。また、調査は遺跡の一部を行ったのみなので詳細は不明であるが、集石遺構は、掘り込みの形態から基本的に次の3つに分類されるようである。

A…径が130cm前後、深さが40cmほどで周壁傾斜角度が約50度(第9、11号)

B…径が150cm前後、深さが30cmほどで周壁傾斜角度が約30度(第3号)

C…掘り込みが浅く、径が200cm前後と角窓が面的掘りをもつ(第2号、第17号)

この他、第16号や第19号のように床面に数ヶ所の凹みのあるものもある。この集石遺構は、それぞれの門みに配石された例もあり、複数の集石遺構が結合したものか、あるいはこれが本来の形態だったか確認しえなかつたが、後者の可能性が大きいと思われる。

当遺跡では、ピットも検出され、集石遺構北部では径10~25cm、深さ15~35cmのピットが東縁、西縁で2列確認された。南西では、径50cm、深さ10cmほどの掘り込みも検出されている。これらの遺構の性格については把握されなかつたが、分布状況より集石遺構に伴うものと思われる。

なお、住居跡は確認されていない。

出土遺物は、集石遺構の検出された第9層暗褐色ローム層中などで押型文土器、貝殻文土器などがあるがその量は少ない。集石遺構内からも同種の土器片が出土しているので、集石遺構は、縄文早期の時期の所産と考えられる。石器は、町教育委員会の調査時に磨石様のものが出土している。

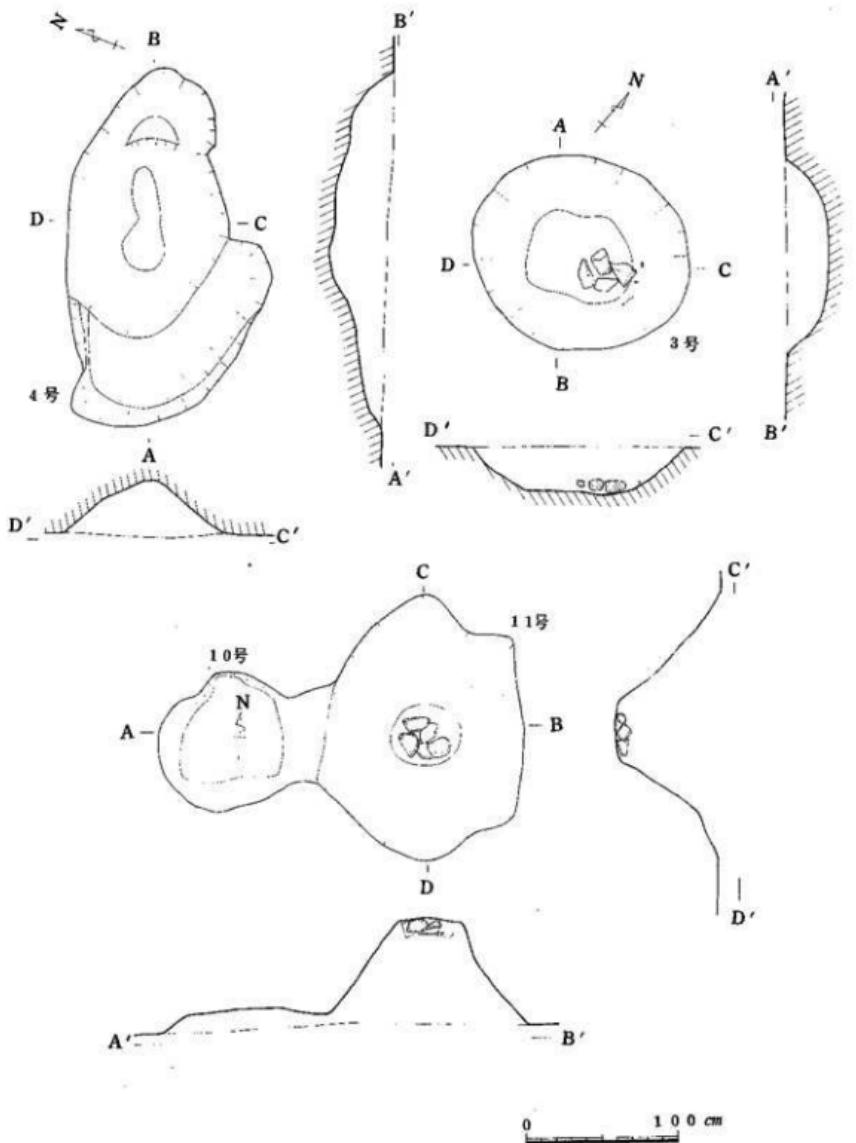
## 2. 遺構

### 第3号集石遺構(第4図)

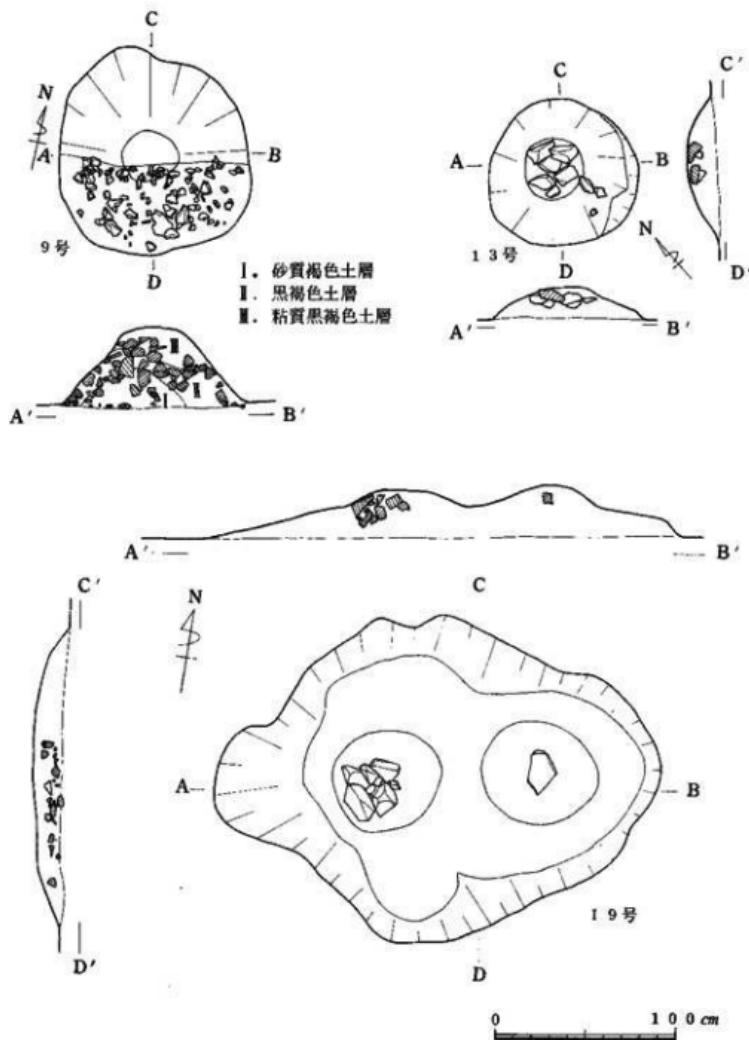
長径147cm、短径127cmの梢円形プランの掘り込みをもち、周壁は約35度の傾斜をもち、B類に属する。床面には、河原石4個による配石があり並行している。掘り込み内には、赤茶色を呈する拳大の砂岩質の角礫がつまつておらず、炭化物も出土している。焼土や周壁の焼けた痕跡はみられない。

### 第4号集石遺構(第4図)

長径230cm、短径130cmの不正梢円形プランの掘り込みで、床面と思われる部分が3ヶ所ある。その深さは、西より28cm、36cm、40cmであり、各床面は、3掘り込みに



第4図 第3, 4, 10, 11号集石遺構実測図



第5図 第9, 13, 19号集石遺構実測図

伴うものと考えられたが、その切合い関係は不明である。

#### 第 9 号集石遺構（第 5 図）

径 110 cm の円形プランの掘り込みで深さ 45 cm、周壁は約 50 度の角度をもって立ち上がる。9 号は A 類に属する。掘り込み下半は小林輕石層中である。中には、焼けた拳大の赤茶色を呈する砂岩質の角礫がつまり、角礫間の埋土は、黒褐色ないし暗褐色を呈する。

#### 第 10、11 号集石遺構（第 4 図）

第 10 号は、径 90 cm、深さ 15 cm の浅い掘り込みをもつ。その東方には、長径 180 cm、短径 130 cm の梢円形プランの掘り込みで、周壁が約 50 度で立ち上がる 11 号が接している。12 号は、床面に 5 個の河原石の配石があり、配石上に炭化物が検出されている。掘り込み内につまっている角礫は焼けているが、焼土等は検出されていない。第 11 号は A 類に属する。

#### 第 13 号集石遺構（第 5 図）

径 80 cm、深さ 15 cm のすり鉢状の掘り込みをもち、床面には河原石による配石がある。B 類に属する。

#### 第 19 号集石遺構（第 5 図）

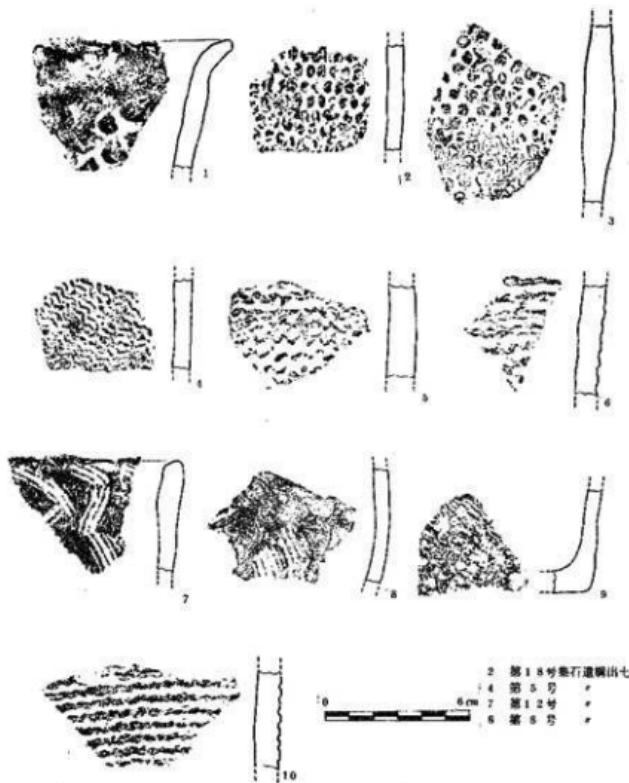
長径 250 cm、短径 180 cm の梢円形プランで角礫の集石が確認された。掘り込みは深さ 27 cm と浅く、床面は 2 ヶ所あり、それぞれに配石がある。19 号は、径 1 m ほどのすり鉢状の掘り込みが結合したように見えるが、その切り合い関係は確認できなかった。

### 3. 出土土器

出土した土器は、押型文土器、貝殻文土器、無文土器等であるが、その量は少ない。集石遺構より出土した土器は、第 6 図 2（第 18 号）、4（第 5 号）、7（第 12 号）、8（第 8 号）の 4 点で、他は暗褐色ローム層から出土している。

1 号は、口縁部が外反し、外面に粗大な梢円文が施文されている。2、3 の梢円の粒子は 1 に比較して細かいが施文法が粗雑である。山形文である 4、5、10 は施文法が粗雑で山形

も乱れている。6の施文具は不明であるが、凹み部分はヘラ様のもので施文されている。7は直口する口縁で端部付近はやや厚くなり、外面に4条の条痕が羽状に縱走する。8にも4条ないし5条の条痕がみられるが、器面は丁寧に調整され焼成も良い。9は底部で、上部に燃系文がみられる。器面の側離がひどい。



第6図 出土土器

## IV 結語

梯遺跡で調査された集石遺構 23 基について、次のようにまとめることができる。

- ① 集石遺構は、丘陵東緩斜面に帯状に分布している。<sup>註4</sup> 完掘の調査でないので断定的ことは言えないが、遺構群はさらにグルーピングできる可能性がある。
- ② 集石遺構は、黄褐色火山灰層（通称アカホヤ）の下の暗褐色ローム層中で発見されている。
- ③ 集石遺構は、掘り込みの形態より基本的に 3 つに分類され、なかには床面に河原石による配石を伴うものもある。
- ④ 掘り込み内には、焼けた角礫がつまっており、炭化物の検出されたものもある。周壁に燒痕や焼土は確認されていないが、集石遺構は「石蒸し」炉的機能をもつと考えられる。
- ⑤ 集石遺構は、出土遺物や発見される層から考えて、縄文早期の所産と考える。
- ⑥ 掘り込みの形態により 3 分類されたが、これは、時期差による形態差ではなく、3 形態は同時期に併用された可能性がある。

県内での集石遺構の調査は、梯遺跡が初めてであったが、昭和 54 年 1 月に清武町辻遺跡<sup>註6</sup>、昭和 56 年 9 月には新富町上日置で調査されるなど調査例が増加しつつある。その他西都市大口川、新富町一丁目、同町丸尾などにおいても法面で発見されている。これらの集石遺構はいずれも丘陵性台地や洪積性台地上で、しかも黄褐色火山灰層下の褐色ローム層で発見されている。

辻遺跡では、掘り込みをもたない平面的集石のみが検出されているが、上日置では、掘り込みをもつ集石遺構があり、その周囲から焼けた角礫が平面的に散在し、角礫上からは押型文土器が出土している。大口川では、褐色ローム層上層に厚さ 1.0 cm 内外の角礫の層があり、一ヶ所のすり鉢状の落ち込みも見られ、角礫層からは、押型文土器、貝殻条痕文土器等が出土している。同様な例は、一丁目、丸尾でも確認されているが、宮崎県内の縄文早・前期の集石遺構は、多様な形態があることを知ることができる。

- 註 1 宮崎県教育委員会「祐川内第Ⅰ遺跡、祐川内第Ⅱ遺跡」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1976)
- 註 2 宮崎県教育委員会「大荻遺跡(2)」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1975)
- 註 3 宮崎県教育委員会「大荻遺跡(1)」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1974)
- 註 4 集石遺構の分布状態や掘り込みの3形態は、福岡県深原遺跡(福岡県教育委員会、「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第8集」1978)の集石遺構に類似する。
- 註 5 鬼界カルデラ噴出の火山灰といわれ、C<sup>14</sup>年代測定においてBP 6390±90Y〔松井1966〕という年代が与えられている。
- 註 6 清武町教育委員会、清武町土地開発公社「辻遺跡」清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告 昭和55年4月
- 註 7 ほ場整備中1基発見され、新富町教育委員会によって調査された。





(1) 遺 跡 遠 景 (北から)



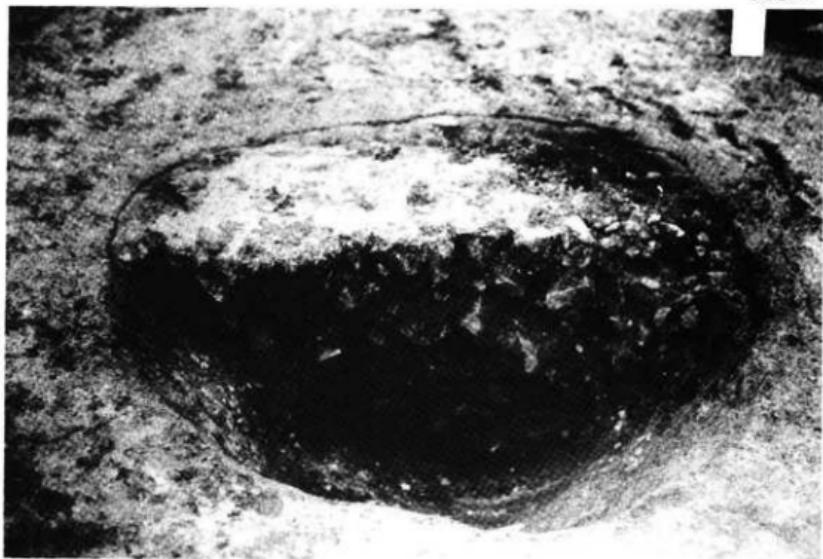
(2) 遺 構 分 布 状 況 (南から)



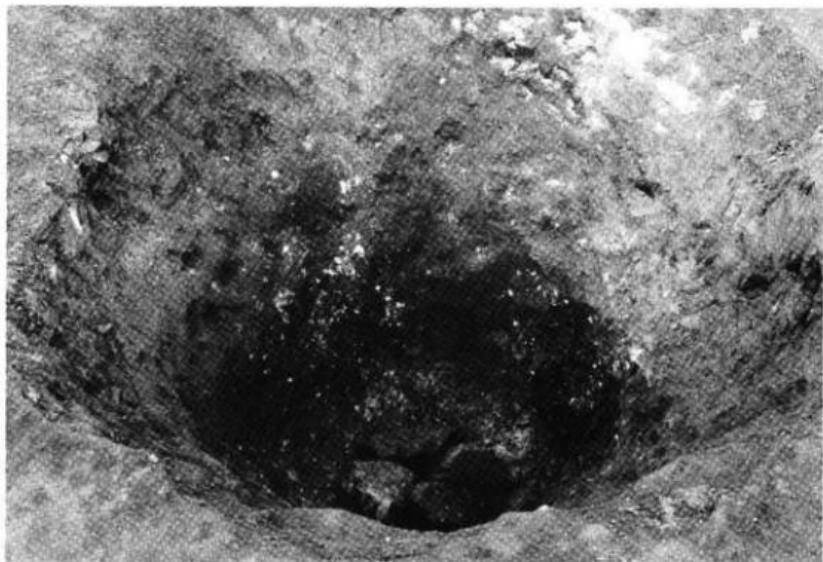
(1) 第 2 号 集 石 遺 構



(2) 第 13 号 集 石 遺 構



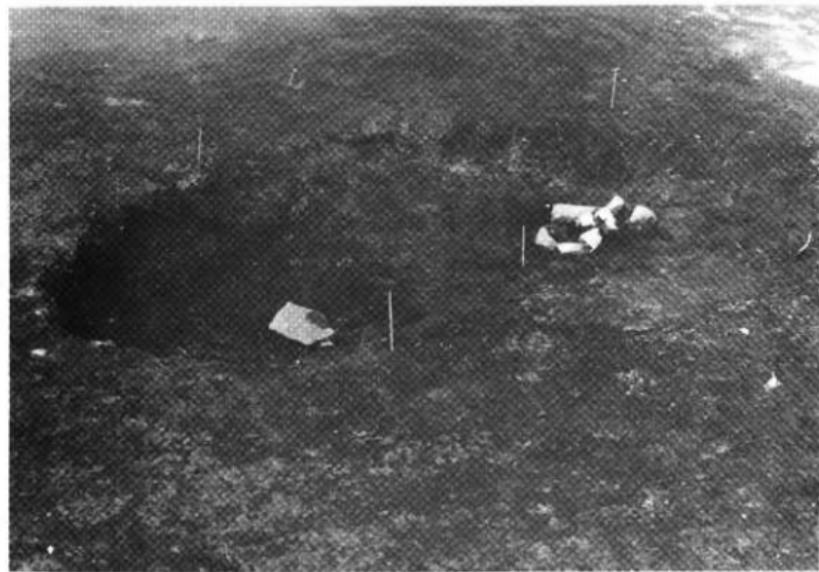
(1) 第 9 号 集石 遺構



(2) 第 11 号 集石 遺構



(1) 第 19 号 集石遺構



(2) 同上